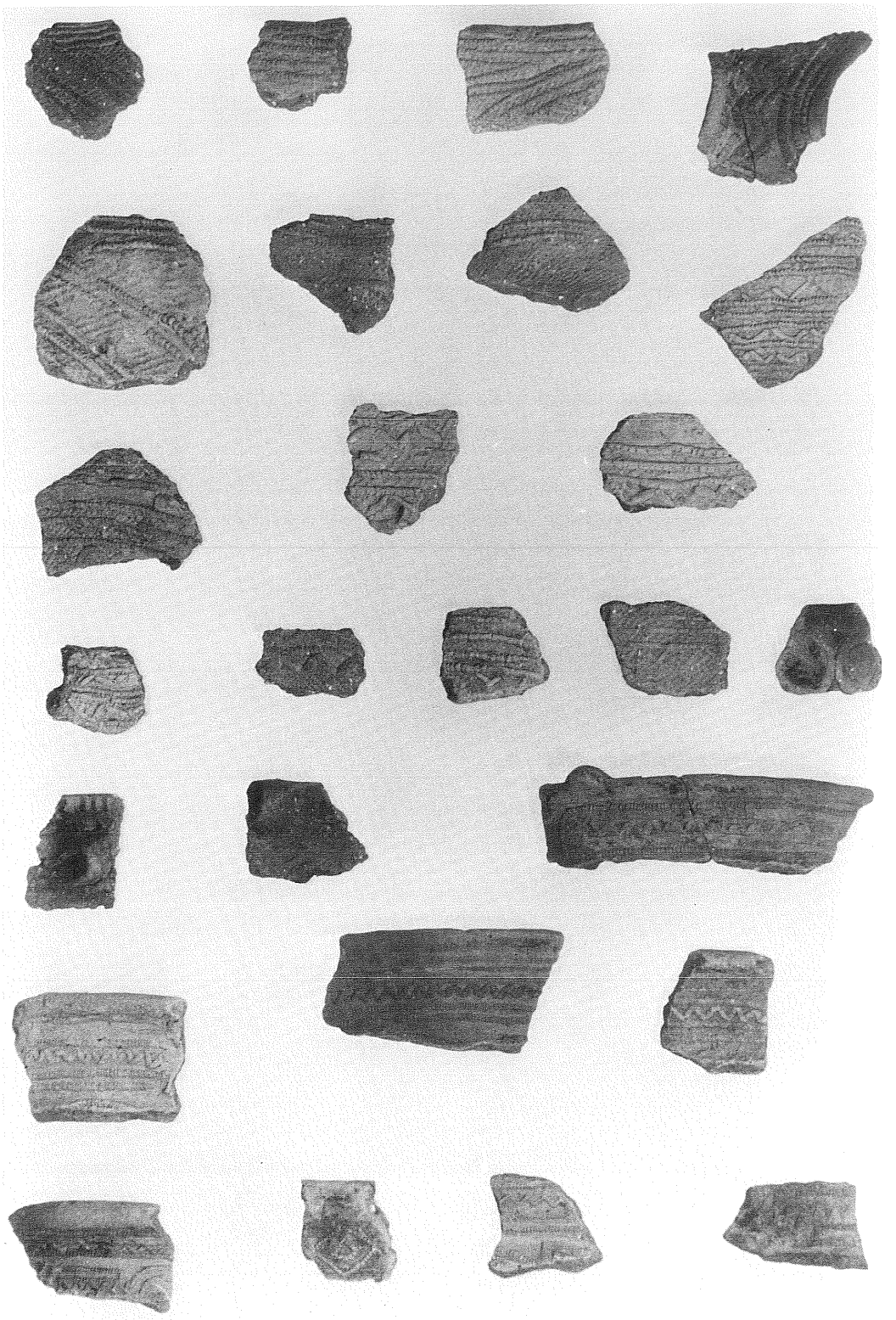
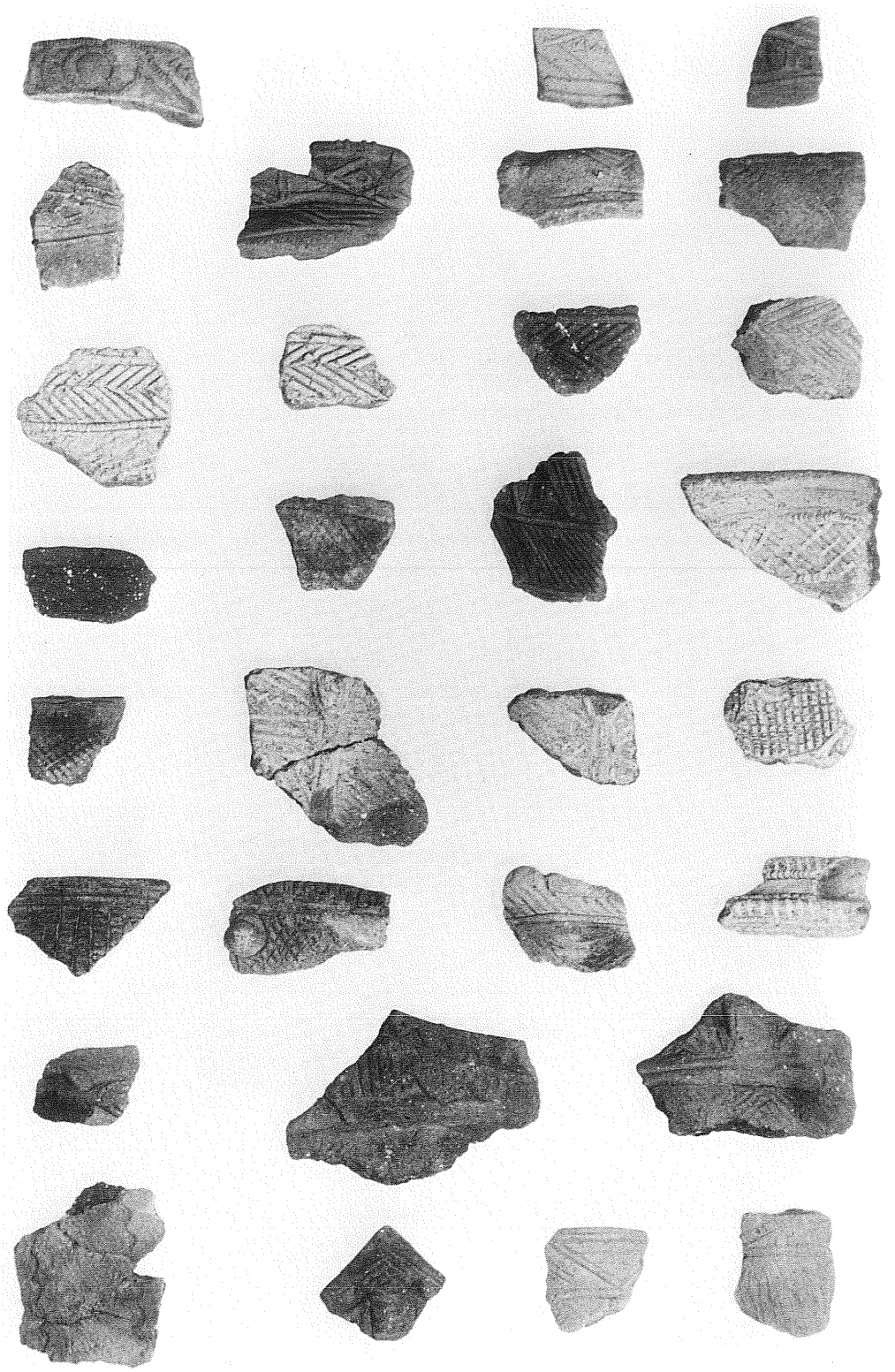
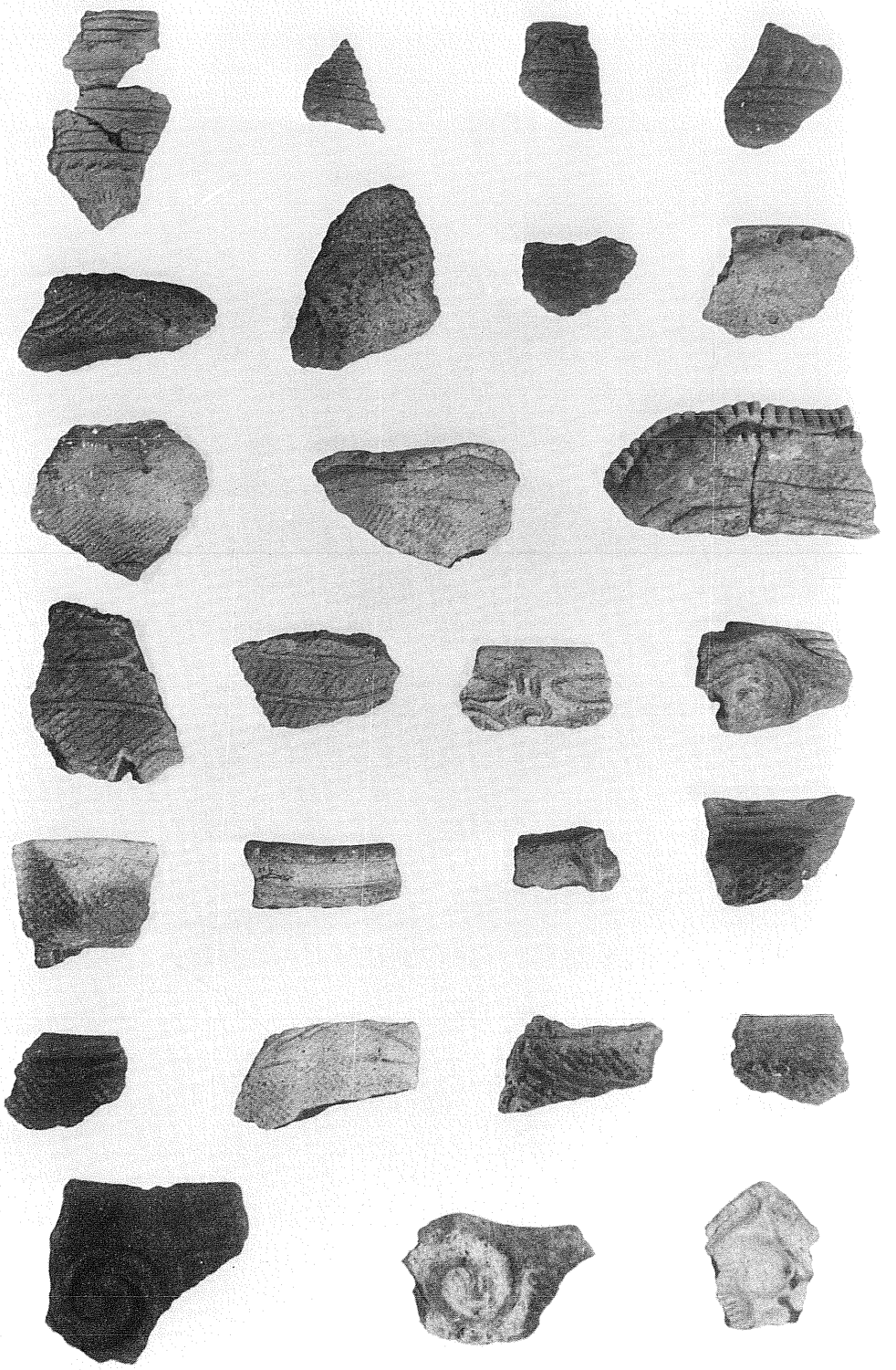


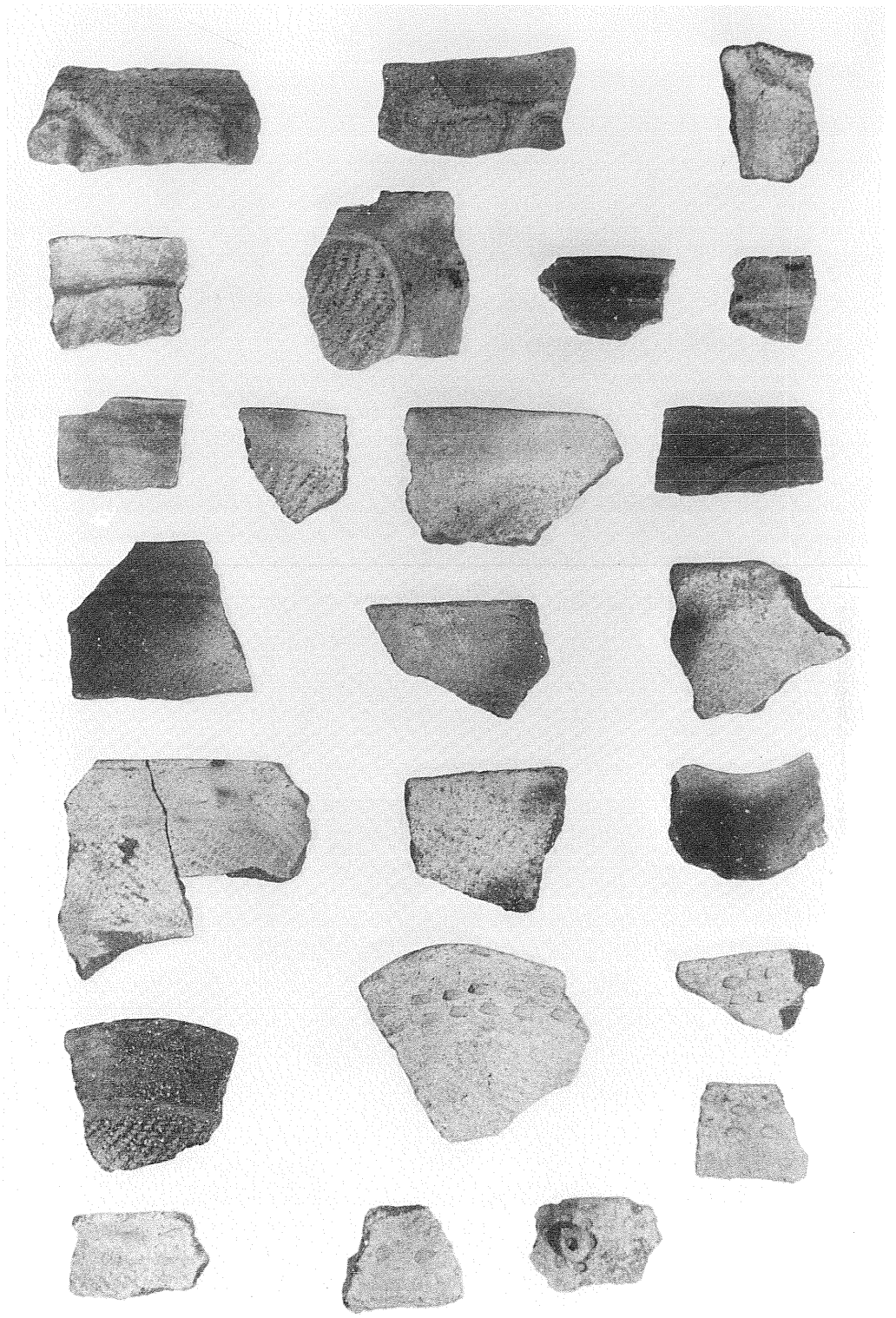
図版26　遺構外出土土器



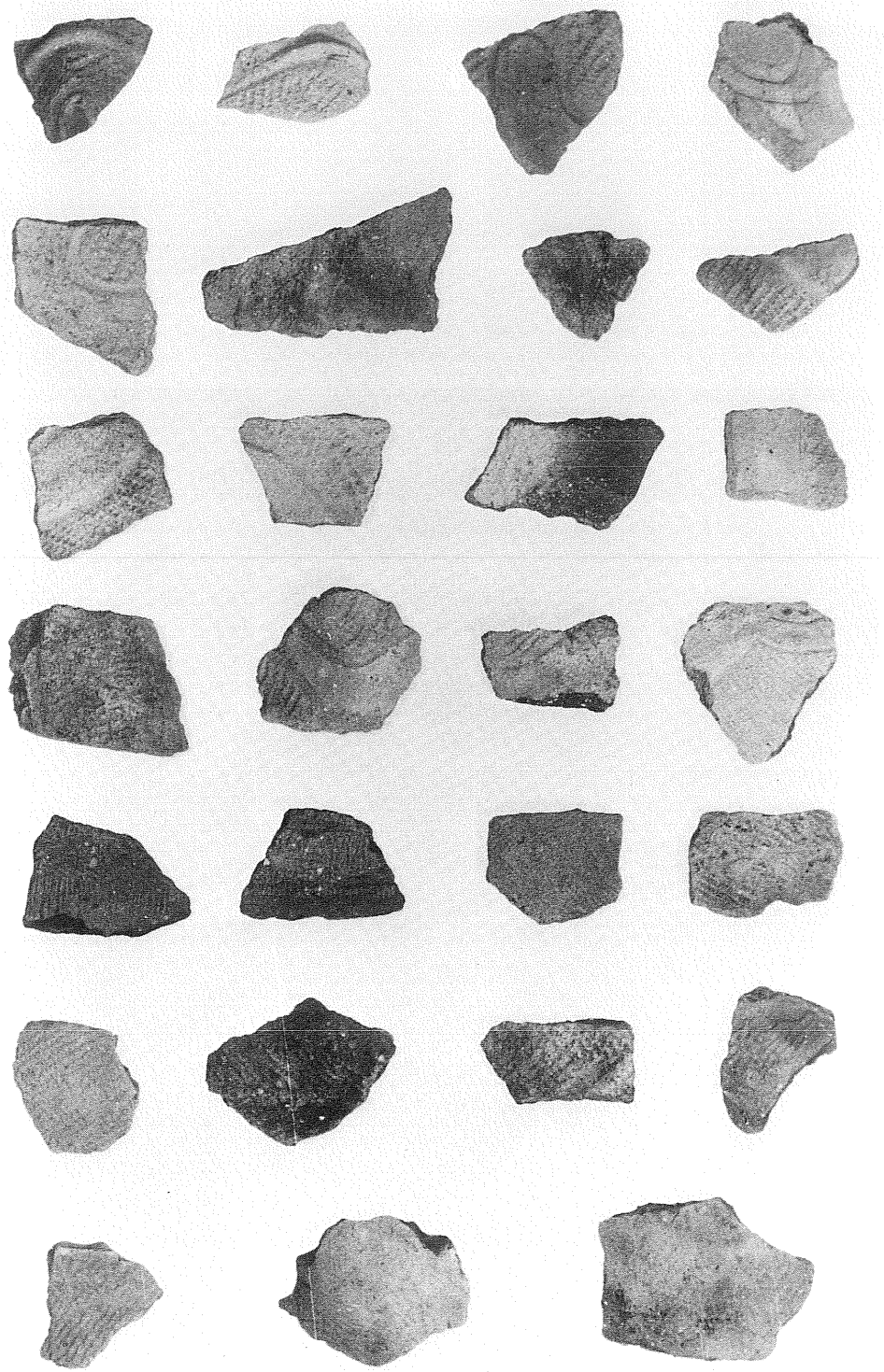
図版27　遺構外出土土器



図版28　遺構外出土土器

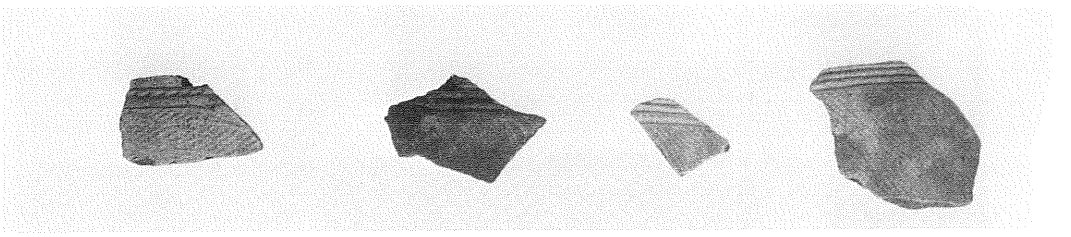


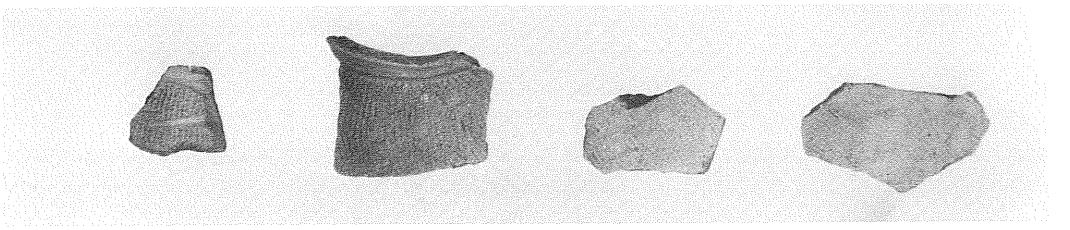
図版29　遺構外出土土器

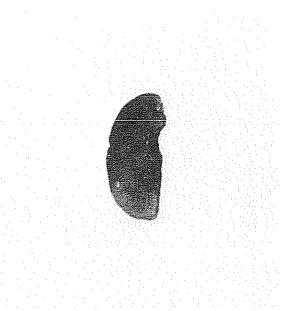


図版30　遺構外出土土器

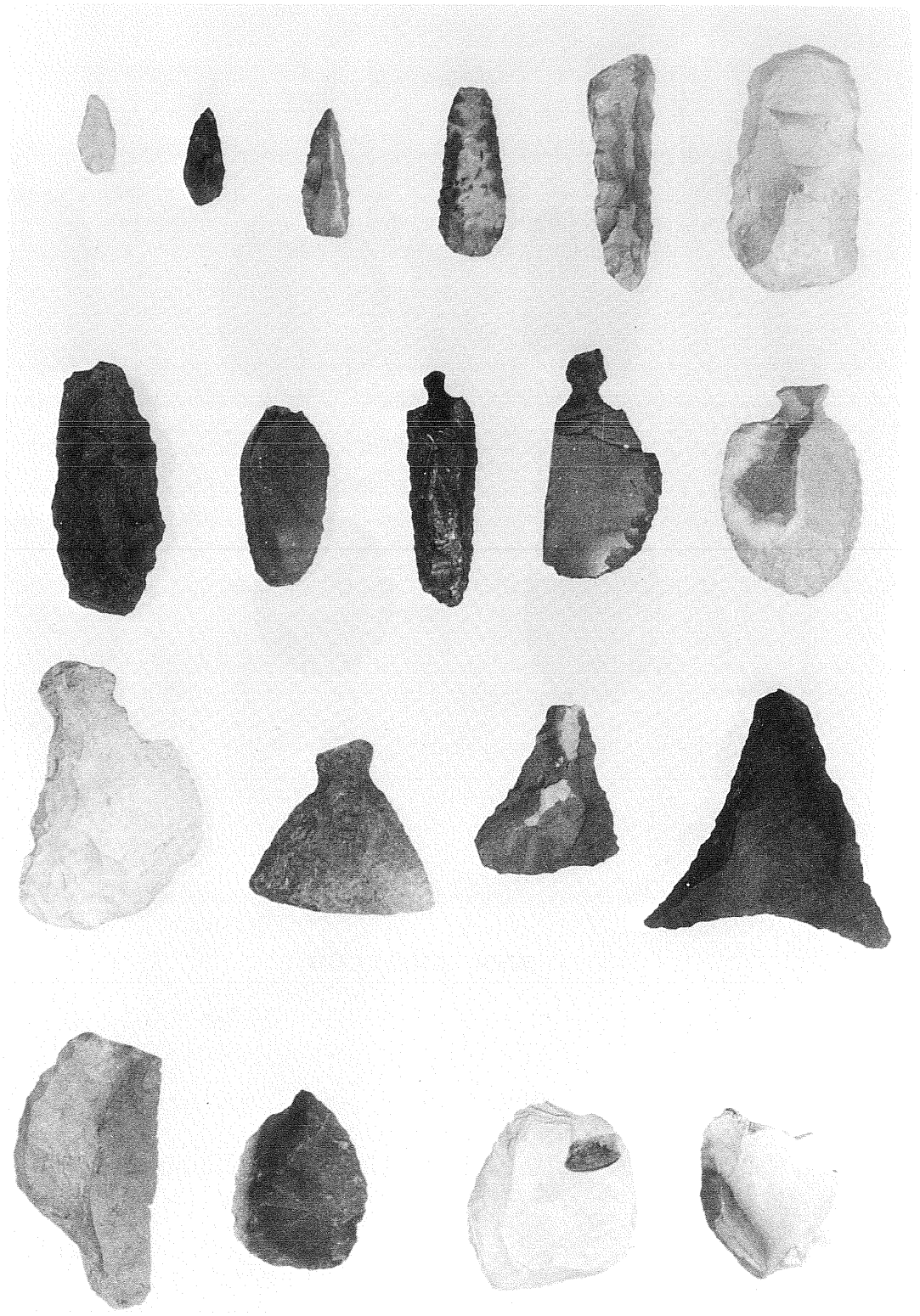
図版31　遺構外出土土器







図版32　遺構外出土遺物



図版33　遺構外出土石器

図版34　遺構外出土石器

下堤Ｇ遺跡（先土器時代）
発掘調査概報

下堤G遺跡・先土器時代の概要

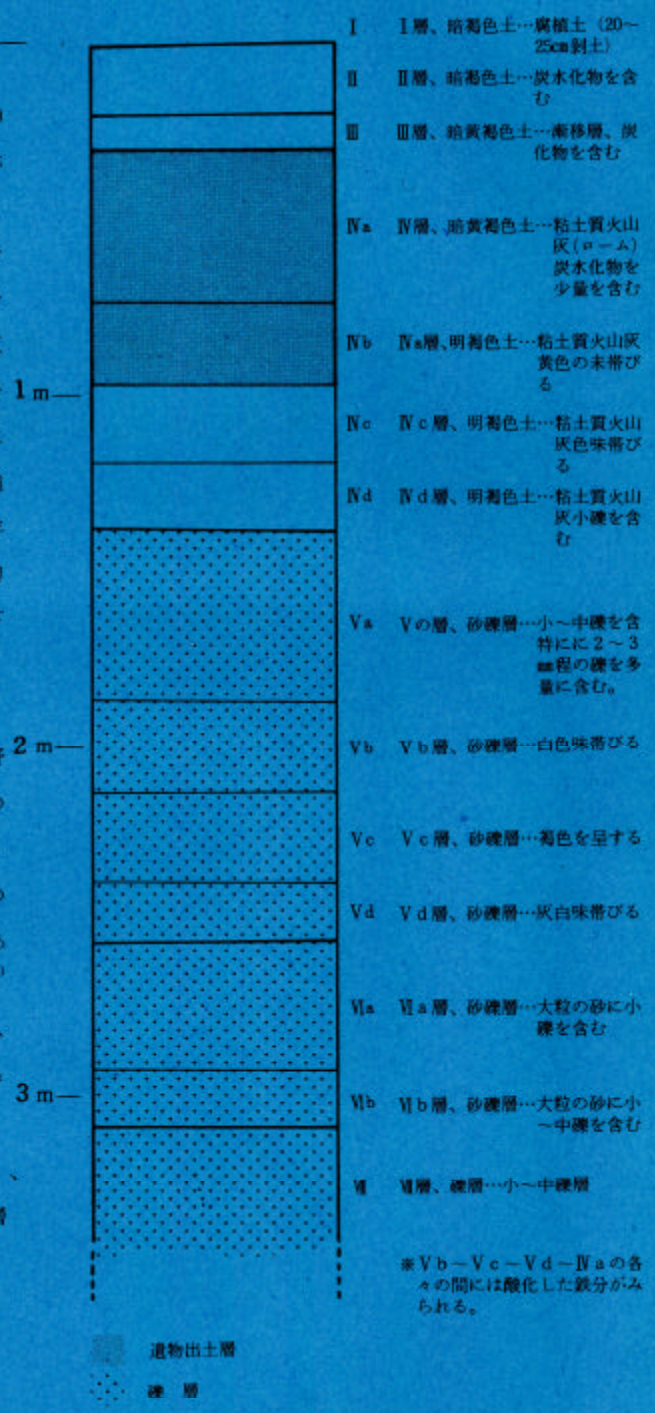
遺跡の概観

南に張り出した舌状台地（約10,000㎡）の東側に位置する。遺跡は縄文時代前期（末）、中期（末）の遺跡との複合であり、秋田県では初めて確認された礫群、土坑を含む先土器時代の遺物集中出土区は縄文時代中期末の住居跡（4号住居跡）と重複し、この住居跡によってこわされている可能性が強い。遺跡の北東約600mに昭和56年発掘調査で石刃、細石刃、彫刻刀形石器（荒屋型）等を出土した下堤D遺跡がある。

層　位

標高40m前後のこの台地は上野台段丘Ⅰと呼ばれており、表層の1～2mの粘土質火山灰層を除くと段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層で厚さは5m程であり、下部は第3系となっている。[1]

先土器時代の遺物はⅢ層（ローム漸移層）、Ⅳa、Ⅳb層（明褐色ローム）からの出土で、以下Ⅳc、Ⅳd層（無遺物層、厚さ30cm前後）、約1m40cmの深さで礫層（（Ⅴ層～）と続く。（第1図）



第1図　地層図

出土遺物

出土石器の総数は870点ほどで（出土層位、地点が明確でないもの22点を含む）、石器の組成と量は、ナイフ形石器（13点）、石刃（43点）、米ヶ森型台形石器（106点）で単純な組成を有し、剥片、砕片の量が多い。他に台石（３点）、礫器（１点）がみられる。

※ナイフ形石器、石刃、米ヶ森型台形石器の分類は富樫（1977年）[3]に準ずる。

ナイフ形石器（第４図１～12、第５図１）

ナイフ形石器は13点出土している。石質は全て硬質頁岩である。小形縦長剥片と石刃（長さ3.5～5.5cm、巾１～２cm）を素材とするものであり、打面部を基部とする一群のナイフ形石器である。

Ａ類

背面のすべての剥離面の打撃方向が主要剥離面と同方向のもの（第４図１、２、３、４、6、７、９、10、11、12、第５図１）

Ｂ類

背面の剥離面の中に主要剥離面と逆の打撃方向の剥離面を含むもの（第４図５）

Ｃ類

背面の剥離面の主体は主要剥離面と同方向で、その中に散発的に横方向からの剥離面をもつもの（第４図８）

打面については、打面を残すものⅠ類、残さないものⅡ類とする。

Ⅰ－ａ類

打面を小さく残し、プランティングが基部両側辺、又は一側片に施され、陵線が左右にゆるく湾曲するものも含み、先端が尖る。（第４図１、２、３、４、先端欠損２、４）

Ⅰ－ｂ類

打面、基部調整はⅠ－ａ類と同様であるが先端がにぶく尖る。（第４図６）

Ⅰ－ｃ類

打面を小さく残し、基部、先端部一側片にプランティングを施す。（第４図７）

Ⅱ－ａ類

打面を取り除く（打瘤が残る）以外はⅠ－ａ類と同様のもの。（第４図５、８、８には基部裏面調整的な剥離がみられる）

Ⅱ－ｂ類

打面は完全に取り除かれ、プランテ イングは基部両側辺又は一側辺に施される。先端は開く形であるが、逆方向からの剥離によるということではない。（第４図９、10、11、第５図１）

Ⅱ－ｃ類

先端部にプランティングを施す以外はⅡ－ｂと同様である。（第４図12）

石刃（第５図２～14、第６図１～12、第７図１～９）

石刃として認定できるものは43点で、石質は全て硬質頁岩である。小形、中形（長さ3.2～8.6cm、巾1～3.3cm）の大きさで中形の石刃が過半数を占める。打角は110°≦α＜120°に最も分布する。

A類

背面のすべての剥離面の打撃方向が主要剥離面と同方向のもの。（第5図2、4、6～8、10～12、第6図1～11、第7図1～6、8、9）

B類

背面の剥離面の中に主要剥離面と逆の打撃方向の剥離面を含むもの。（第6図9、12、第7図7）

C類

背面の剥離面の主体は主要剥離面と同方向で、その中に散発的に横方向からの剥離面をもつもの。（第5図3、5、9、13、14）

石刃核（第17図1）

石刃の出土量からすると石刃核が極端に少なく、小形の石刃核が1点だけである。半円の平坦打面をもつ石核で、頭部調整を行ない剥離されている。横方向からの剥離が一面みられる。

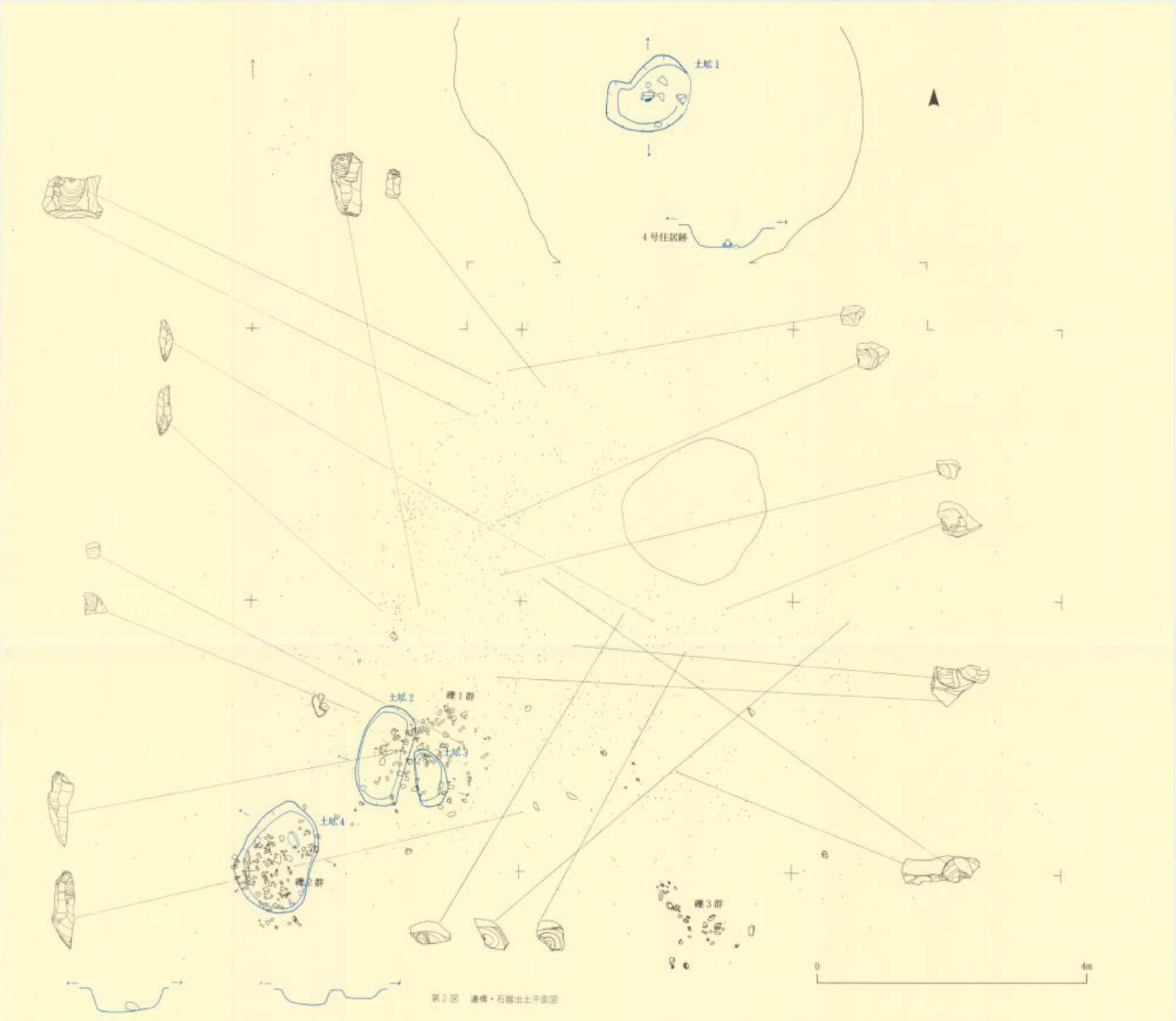
米ケ森型台形石器（第8図1～12、第9図1～17、第10図1～12、第11図1～15、第12図1～12、第13図1～10、第14図1～9）

昭和50年、秋田県「米ケ森遺跡」（富樫、村岡、1976年[3]）で、新しい技法による剥片剥離の石器が確認され、「米ケ森型台形石器」と名づけられた一群の石器がある。今後、資料の増加、組成、機能の細検討の余地はあるにしても、完成された石器であることはまちがいない。名称については一応、米ケ森型台形石器として進める。

米ケ森型台形石器は106点出土している。石質はすべて硬質頁岩である。石器の特徴は、打面は平坦で、多くは大きく残る。大きさ（第15図）、形態に規格性が強く、末端はヒンジフラクチャーで終ること。打面を上にして背面石側に最も古い石核面を残し、その面と主要剥離面が鋭利な刃部を形成する。最も古い石核の左側に直前の剥離痕を残すのが通常である。刃部には例外なく微細な刃こぼれがみられる。打面と相対する末端に二次加工があるものが6点ある。以上のような特徴点を上げて米ケ森型台形石器の認定をして置く。

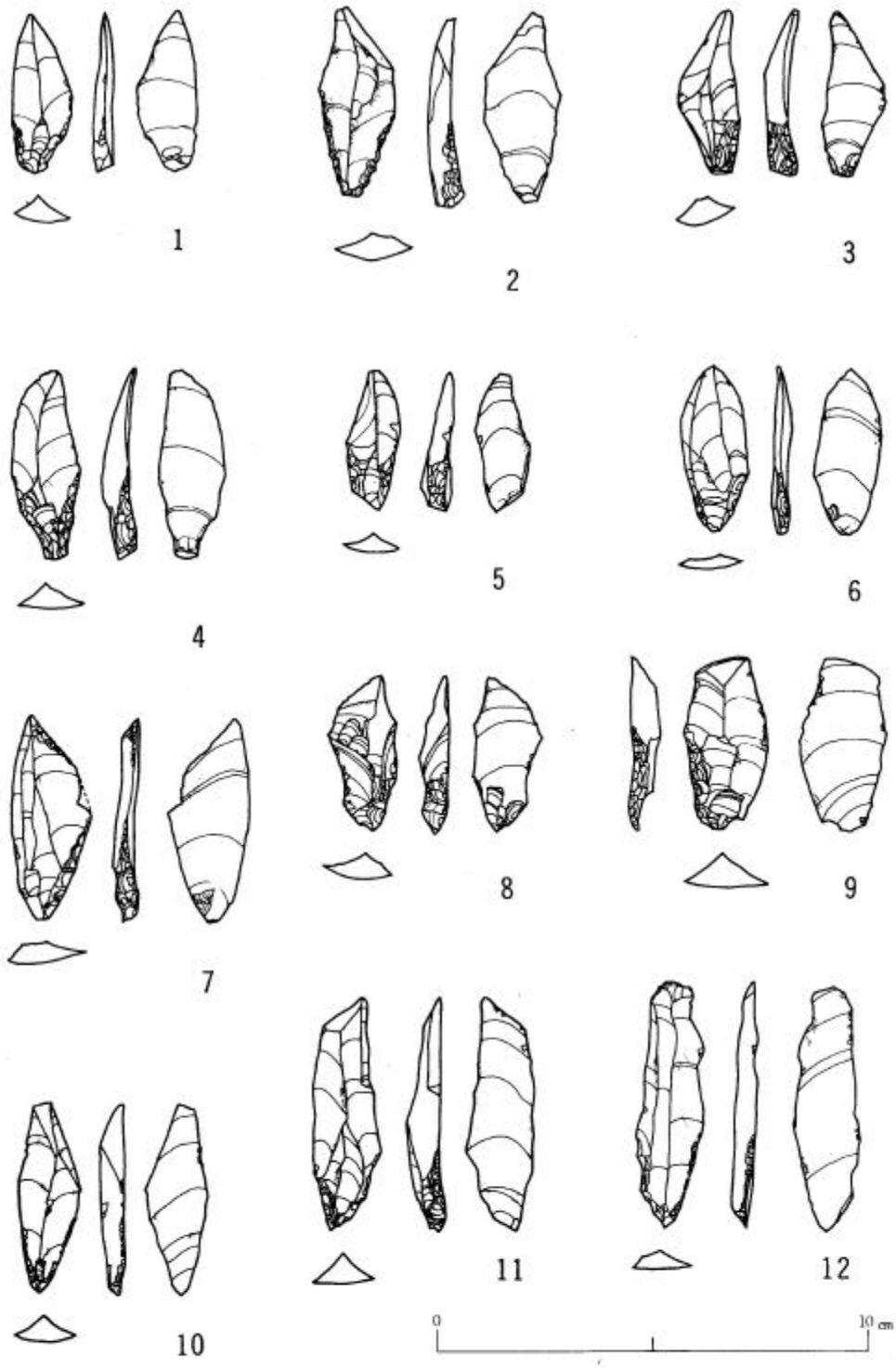
石核（第17図2～9、第18図1～4）

約20点ほど確認されている石核はすべて米ケ森型台形石器を剥取したもので、自然面が残る石核が11点ある。「米ケ森遺跡」の米ケ森型台形石器石核も自然面の残るものが多い。打面と米ケ森型台形石器剥離面の作出はかなり意識されており、剥離方向は基本的に左から右に行なう（米ケ森技法）が、米ケ森型台形石器剥取面が各方向に作出される例が多く、それだけ各方向からの剥取がみられ、必ずしも剥離痕が石核に残らない事を考慮しても一方向、一面から10回以上の連続剥離された石核はない。

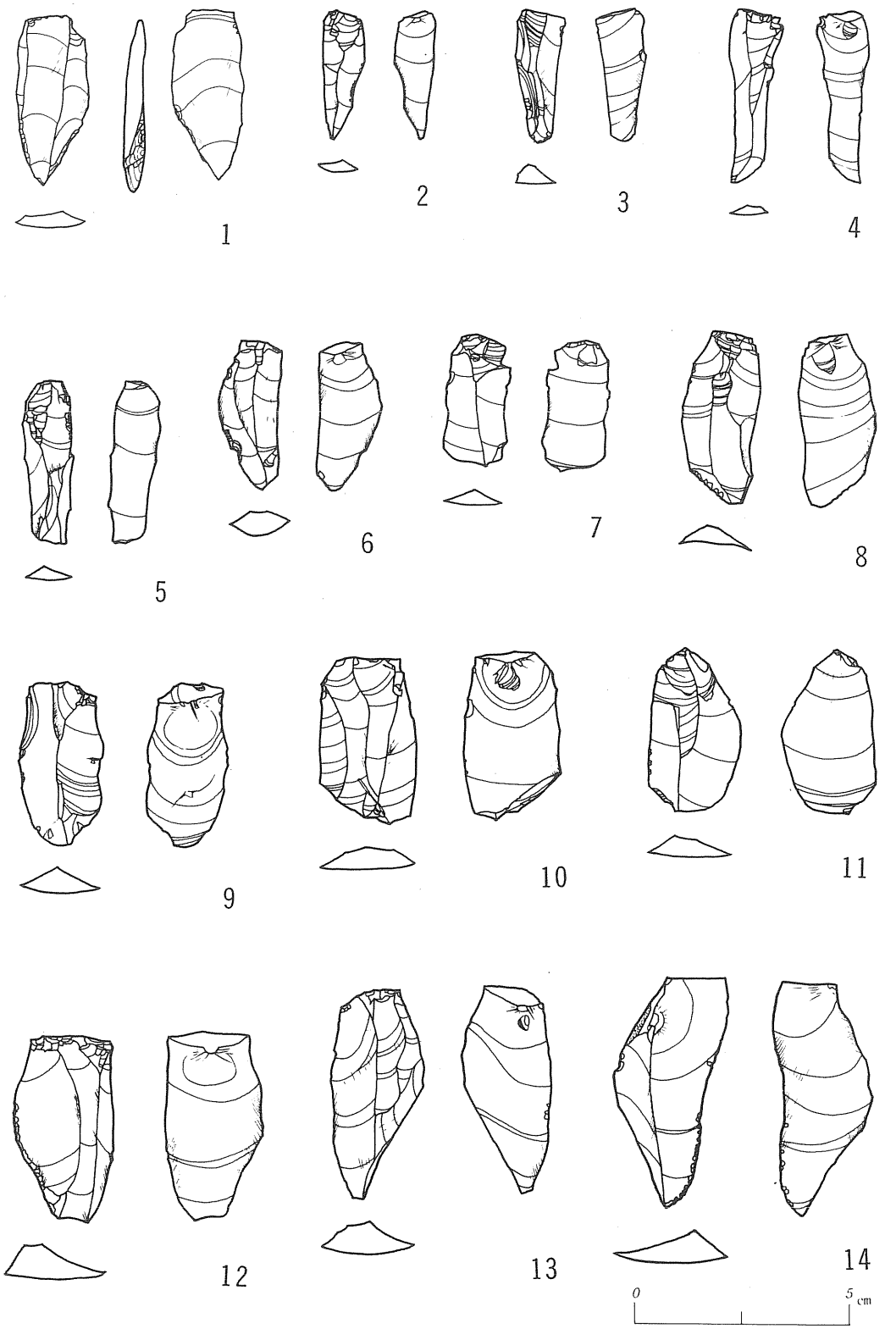


第2図　遺構・石器出土平面図

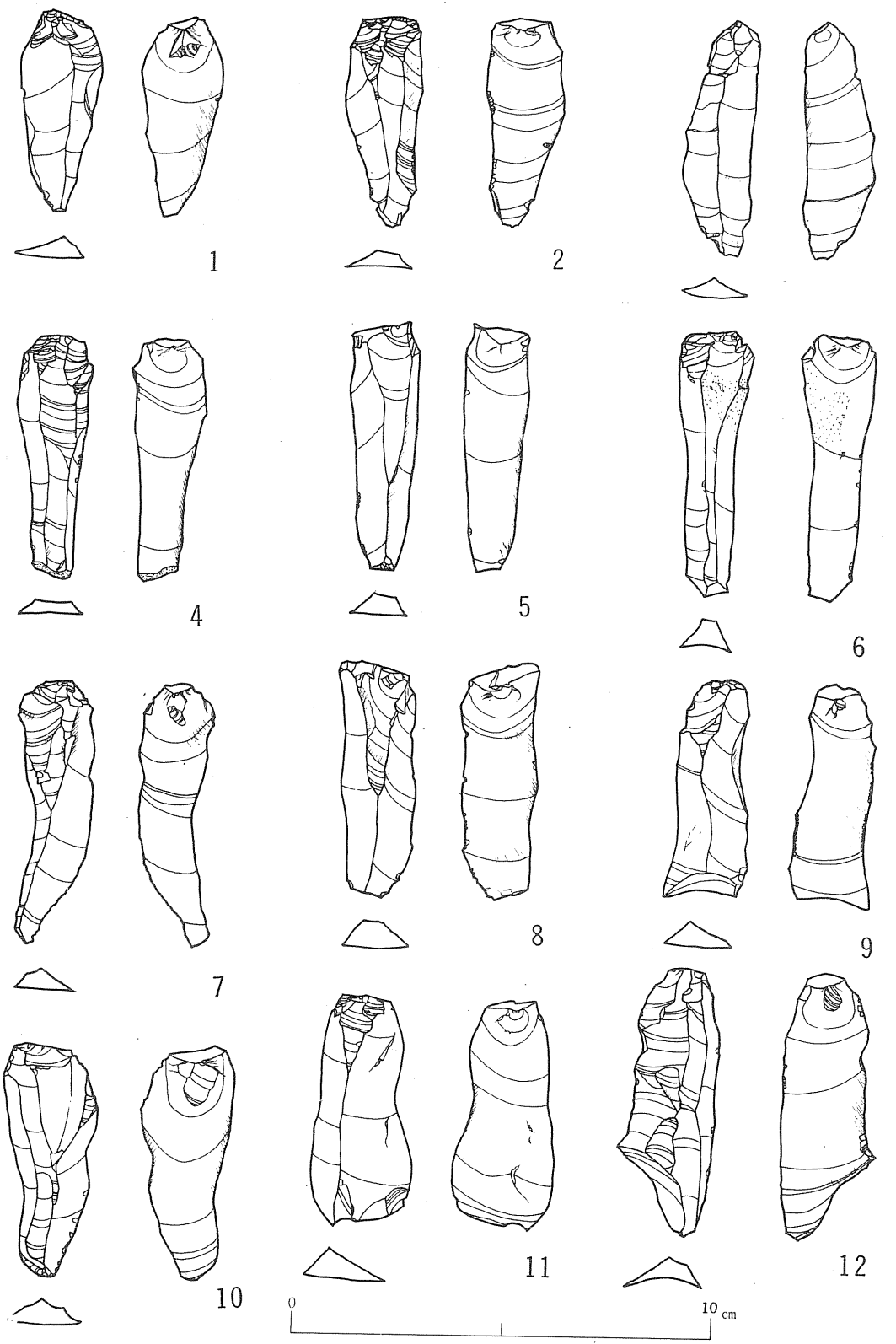
第3図　石器・礫群、垂直分布図　（青線は礫のレベル）



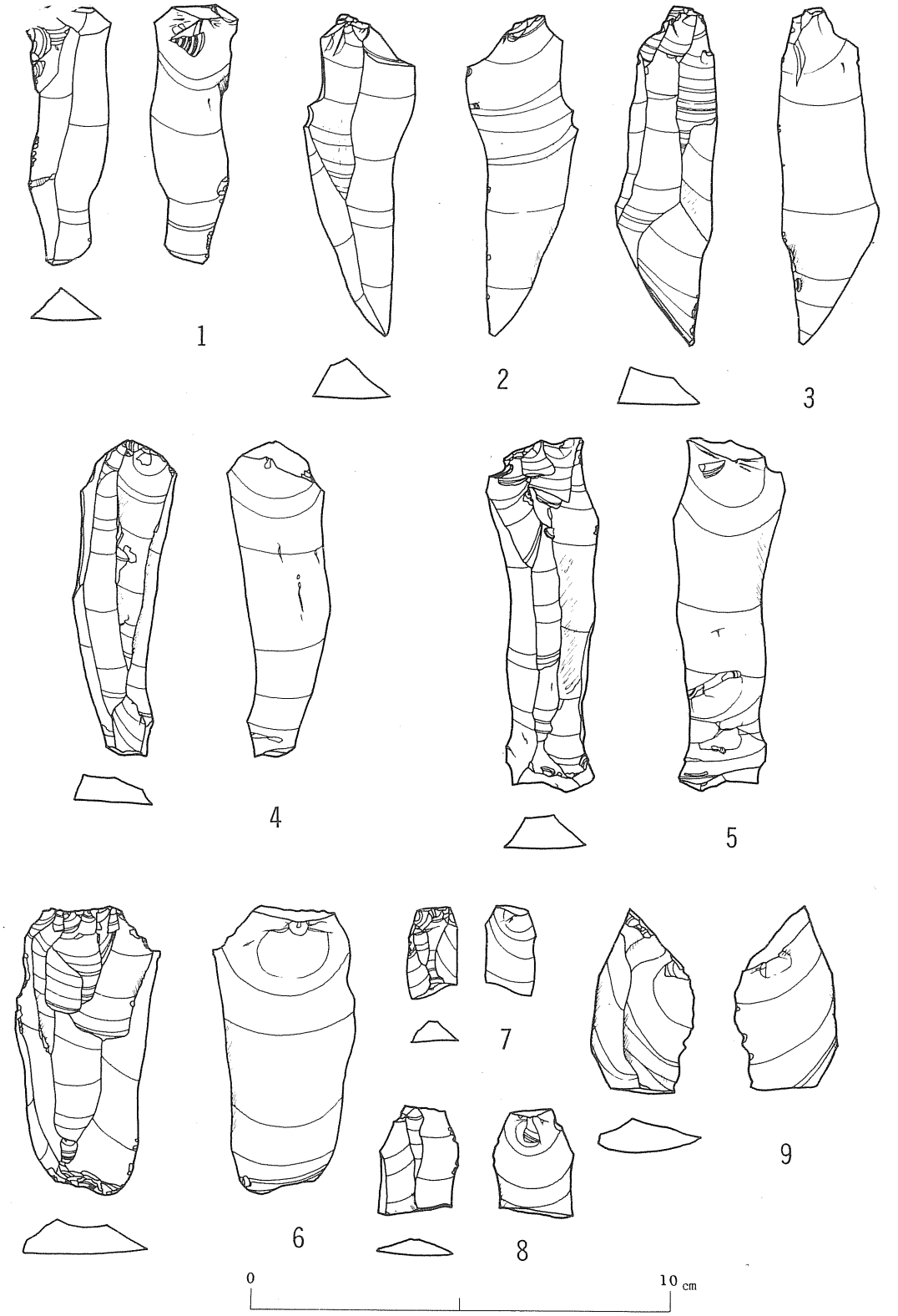
第４図　ナイフ形石器



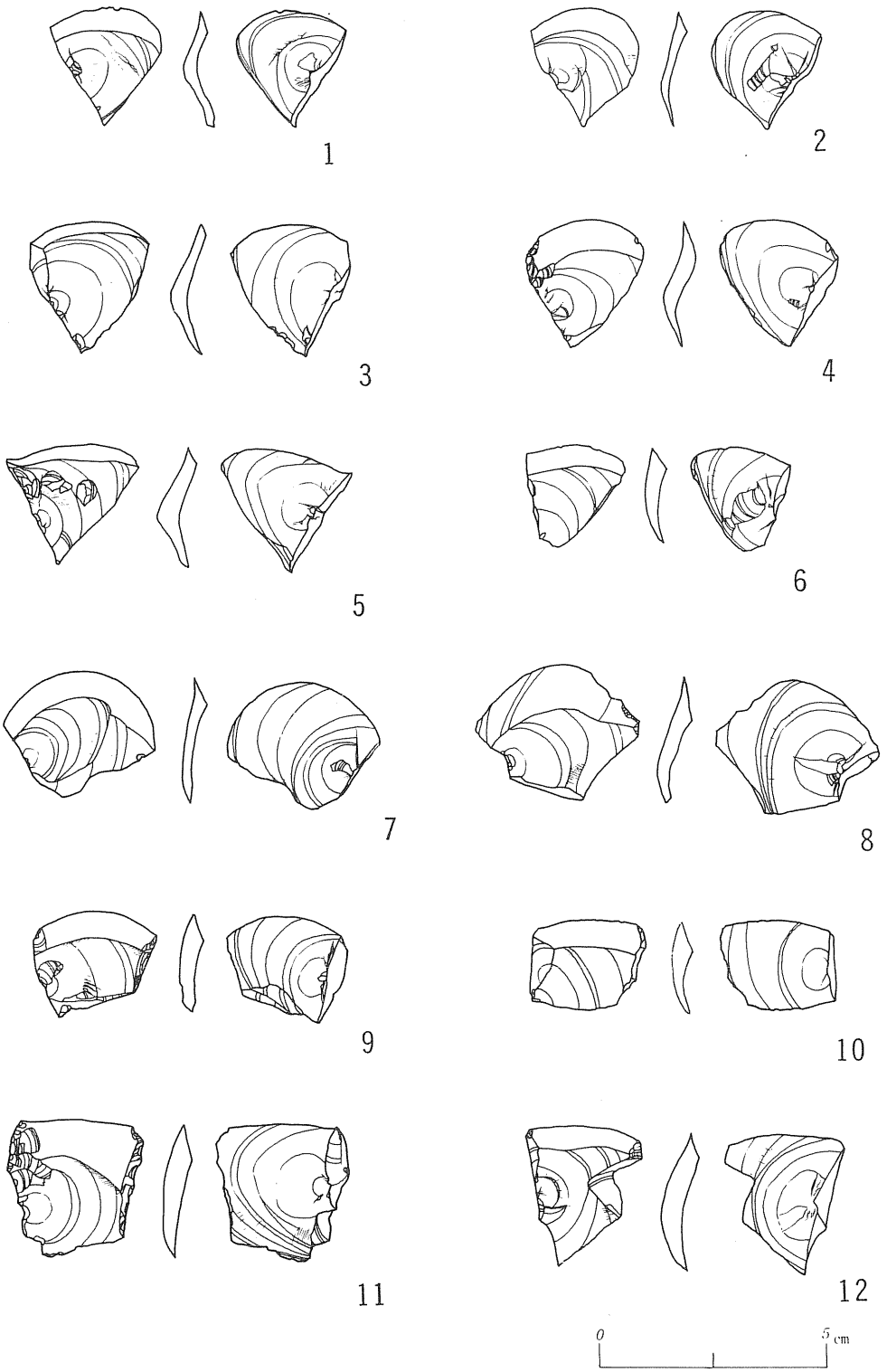
第５図　ナイフ形石器・石刃



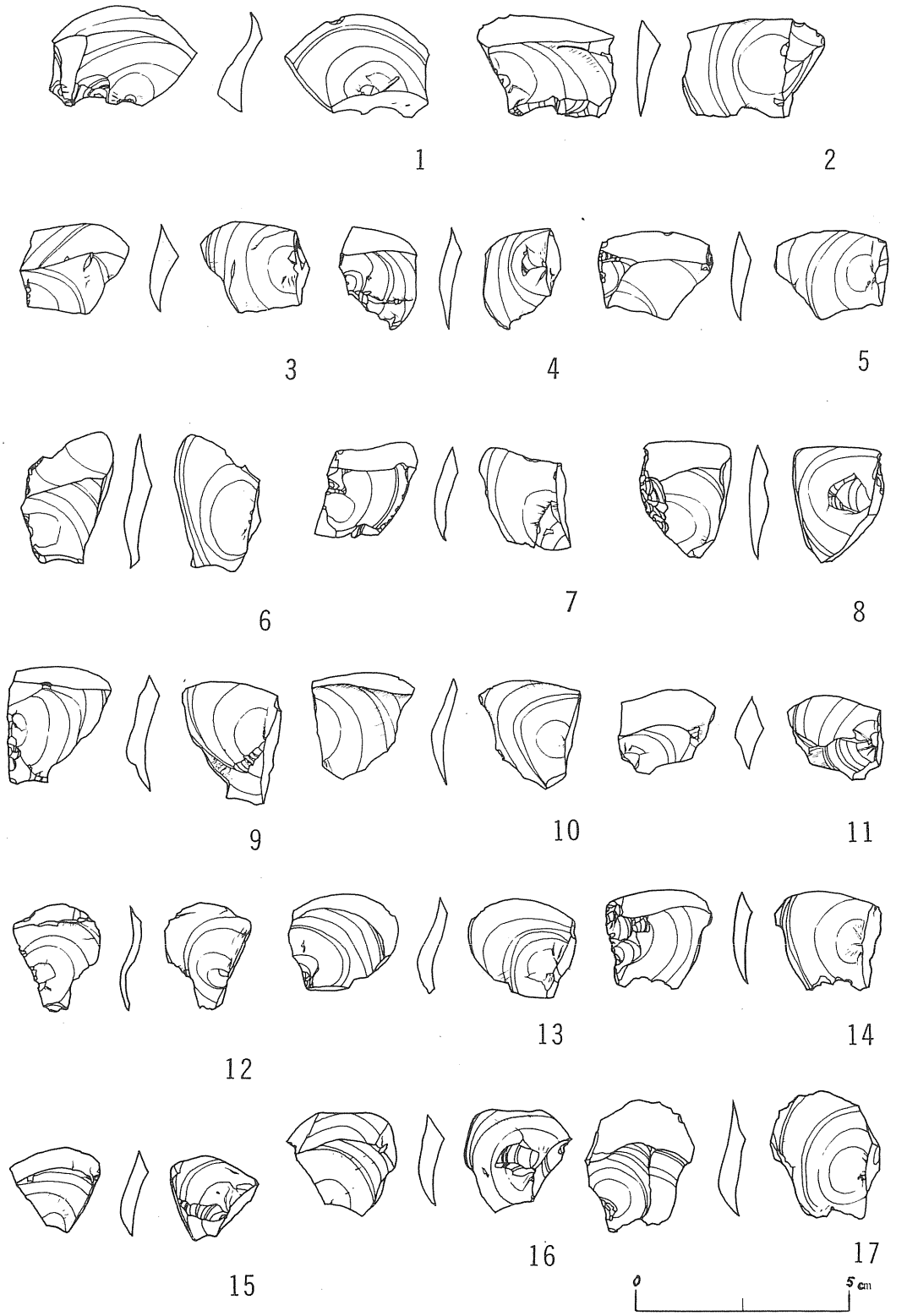
第6図　石刃



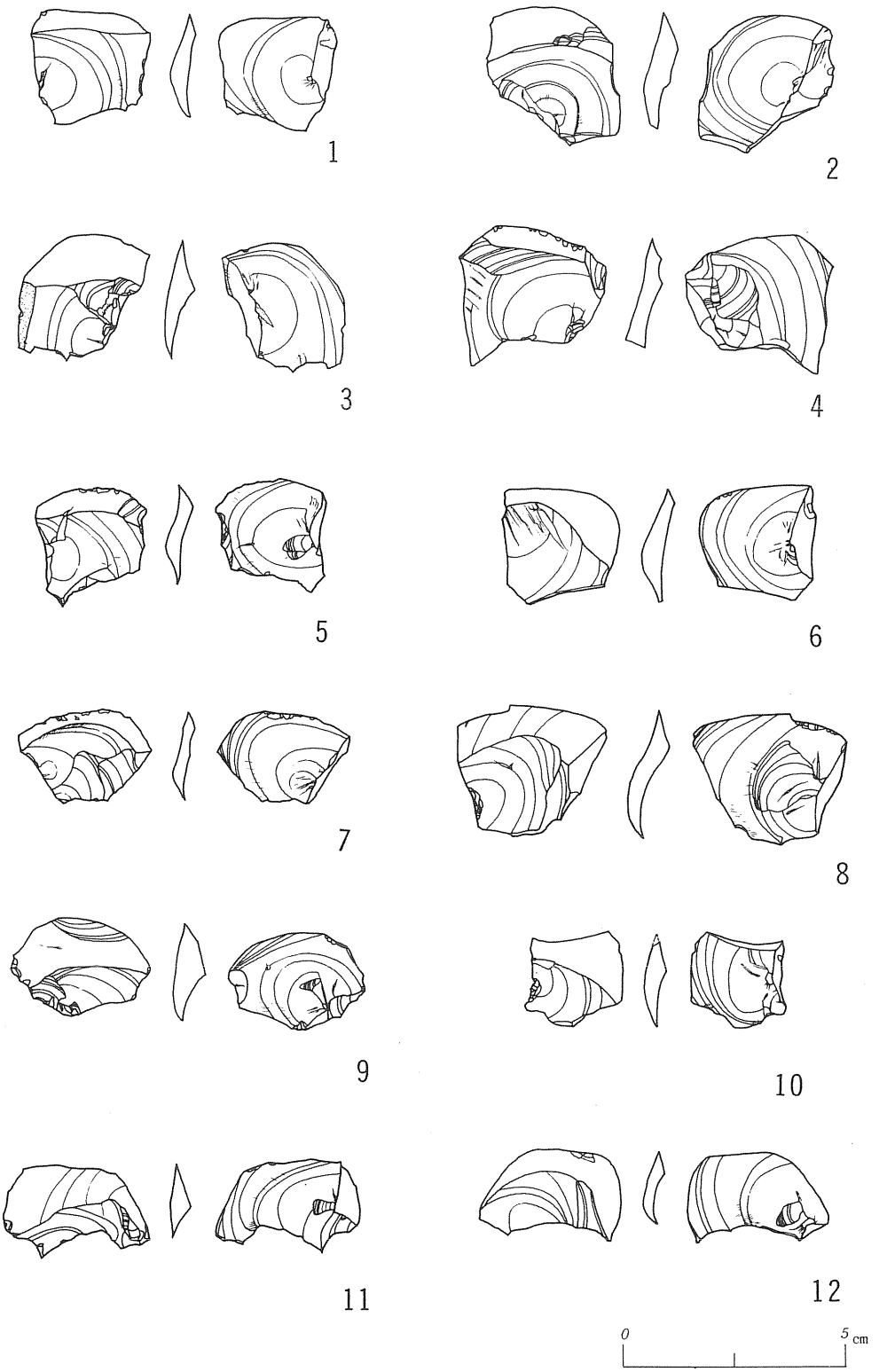
第7図　石刃



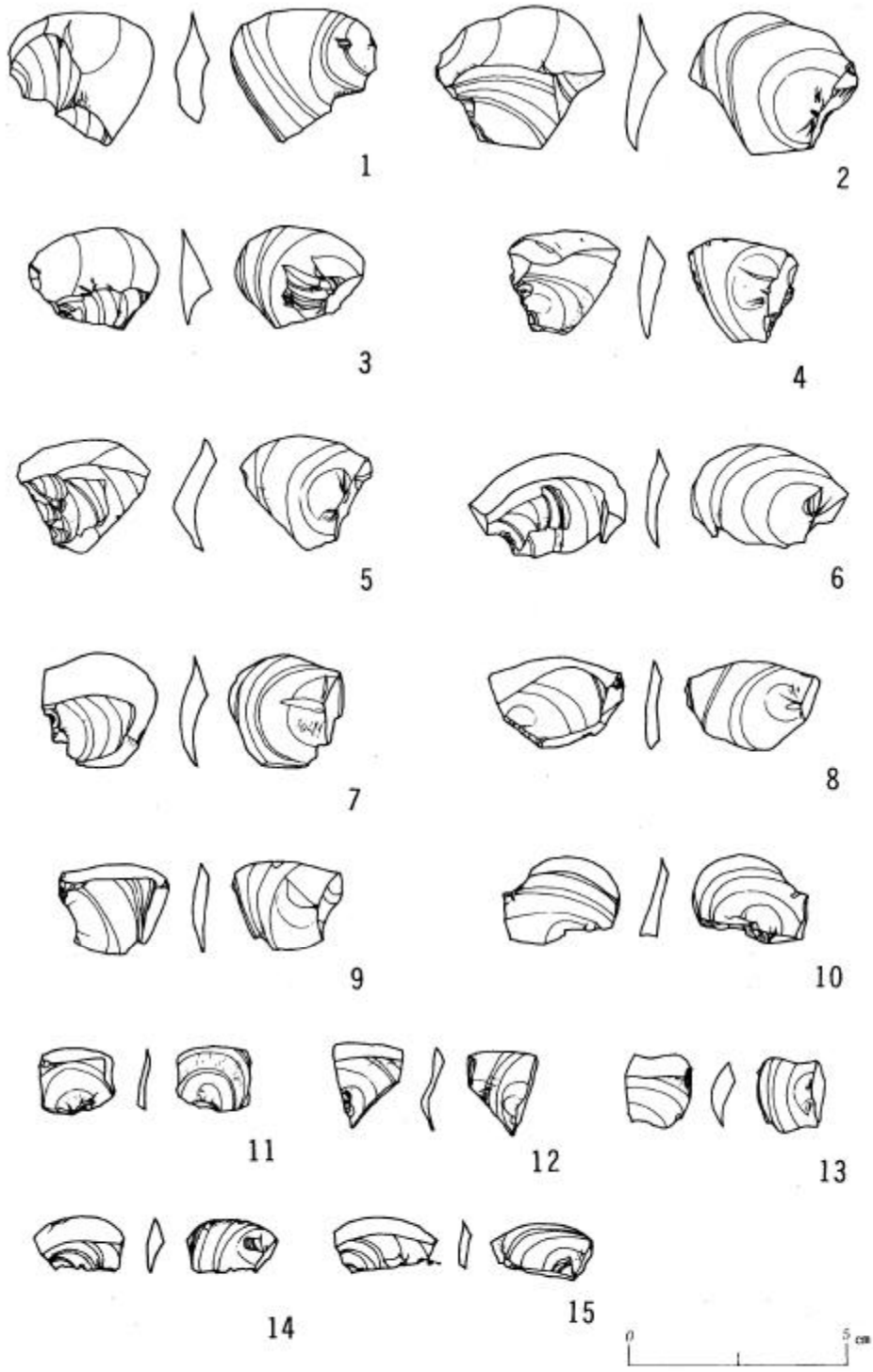
第８図　米ケ森型台形石器



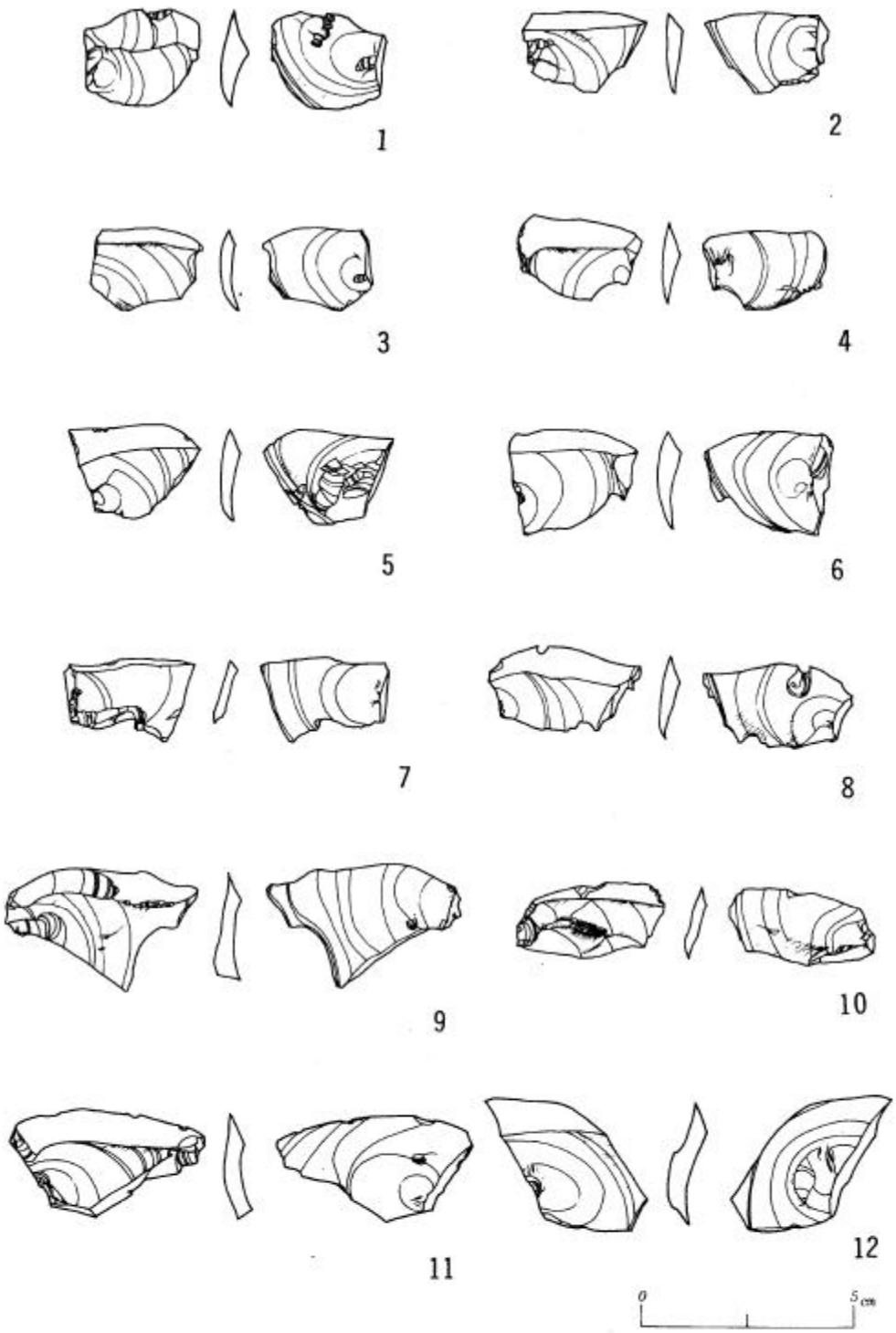
第９図　米ケ森型台形石器



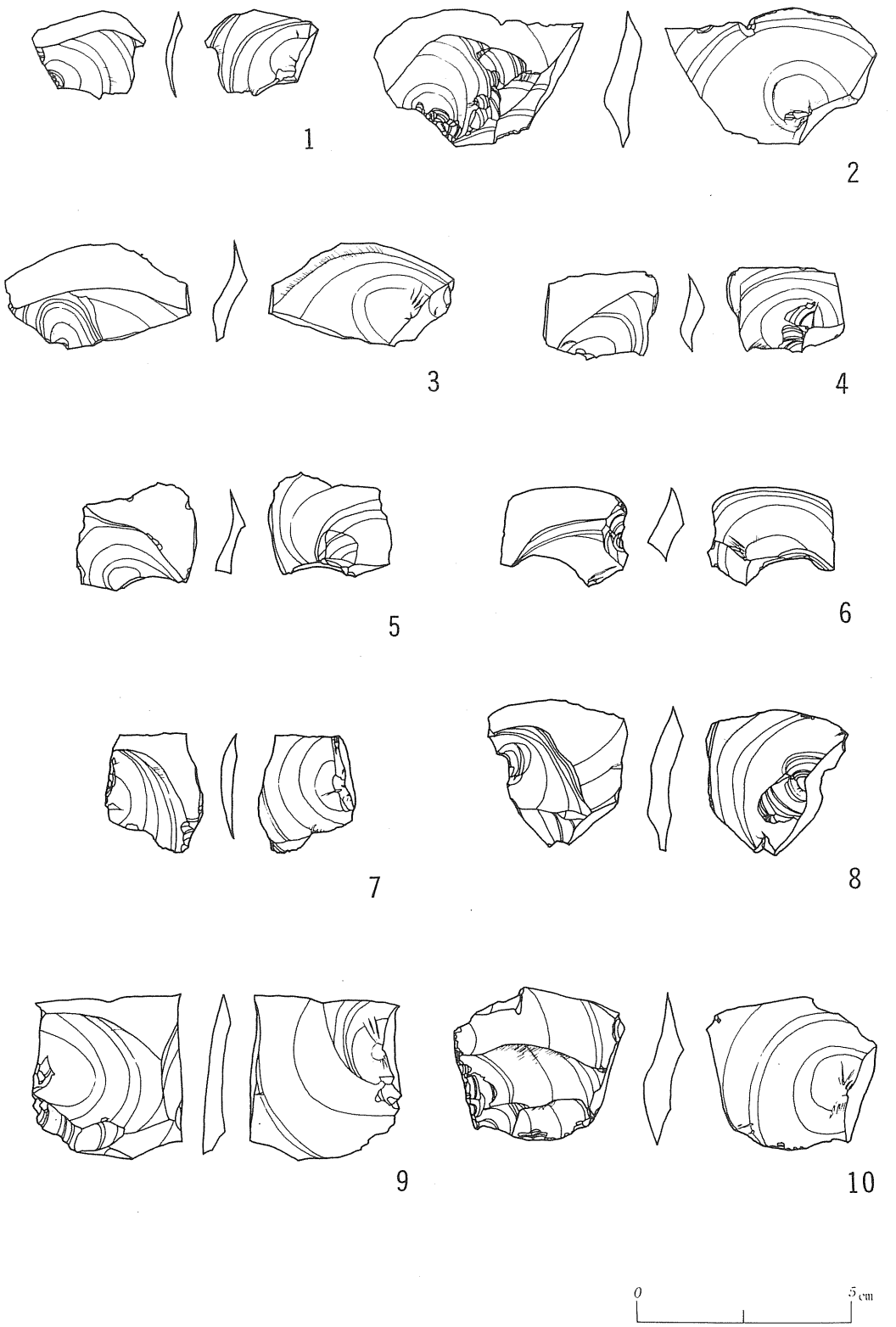
第10図　米ケ森型台形石器



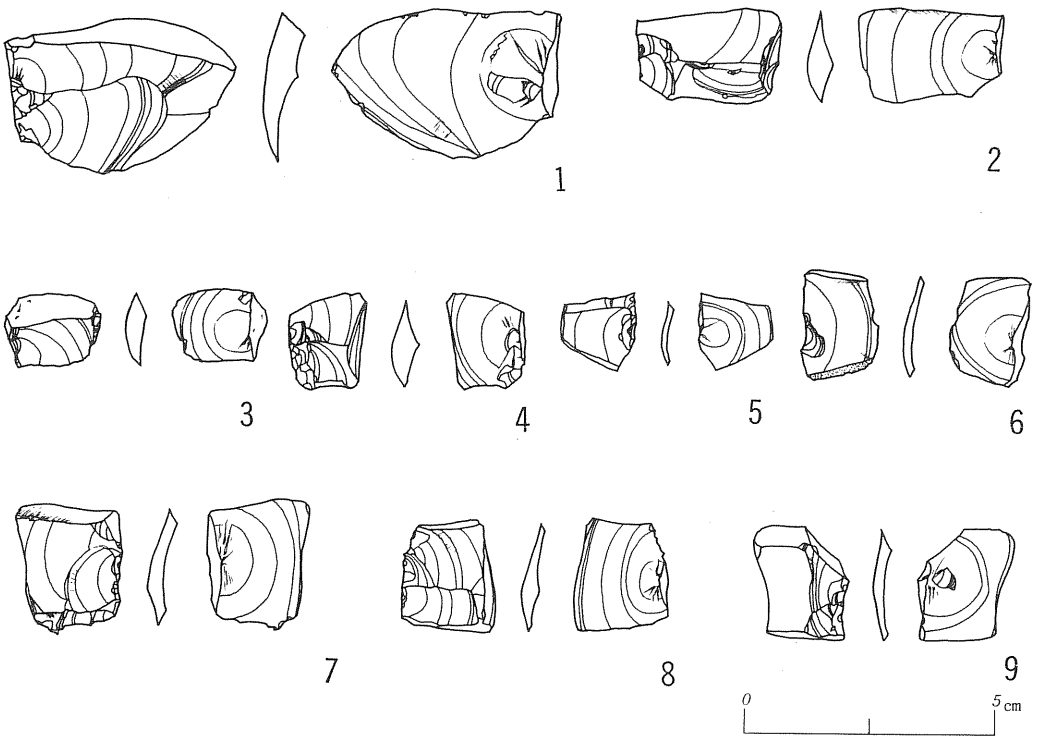
第11図　米ケ森型台形石器



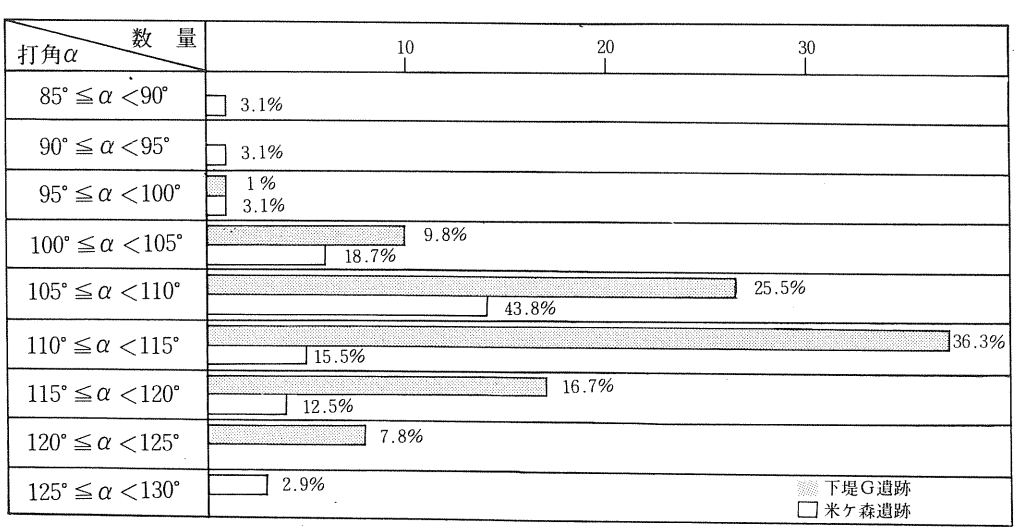
第12図　米ケ森型台形石器



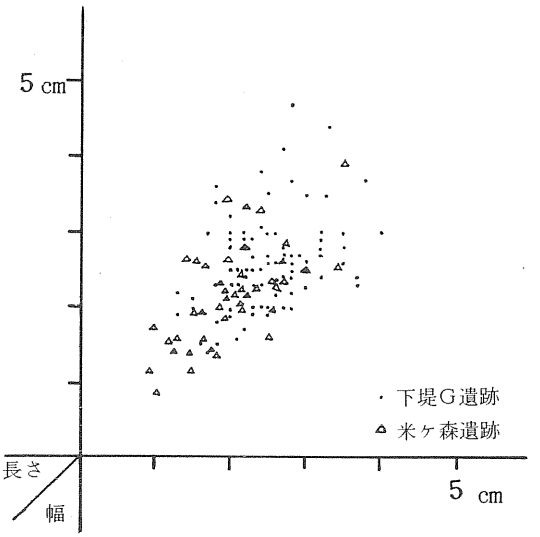
第13図　米ケ森型台形石器



第14図　米ケ森型台形石器



第15図　米ケ森型台形石器打角分布



第16図　米ケ森型台形石器長幅分布

接合資料（第18図５～９、第19図１～５）

ナイフ形石器＋ナイフ形石器、石刃＋石刃、石刃＋石核、米ケ森型台形石器＋米ケ森型台形石器、米ケ森型台形石器＋石核がある。

両面礫器（第19図６）

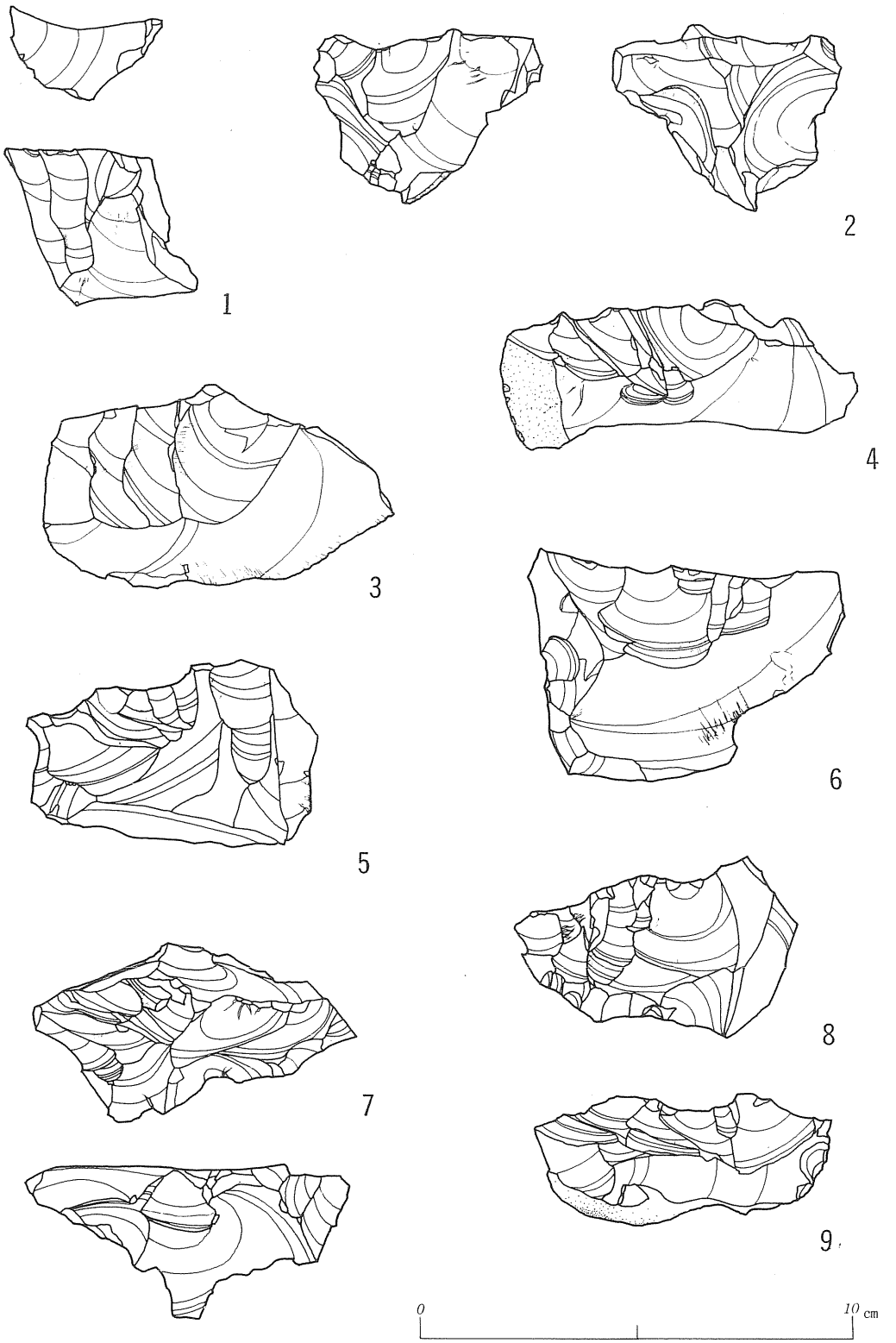
この礫器は先土器時代の遺物出土地区の北西グリッド（第Ⅱ層）出土であり、出土地点は不明である。自然礫の一部を両面からの連続剝離で刃部を作っている。石質は凝灰岩である。

遺　構

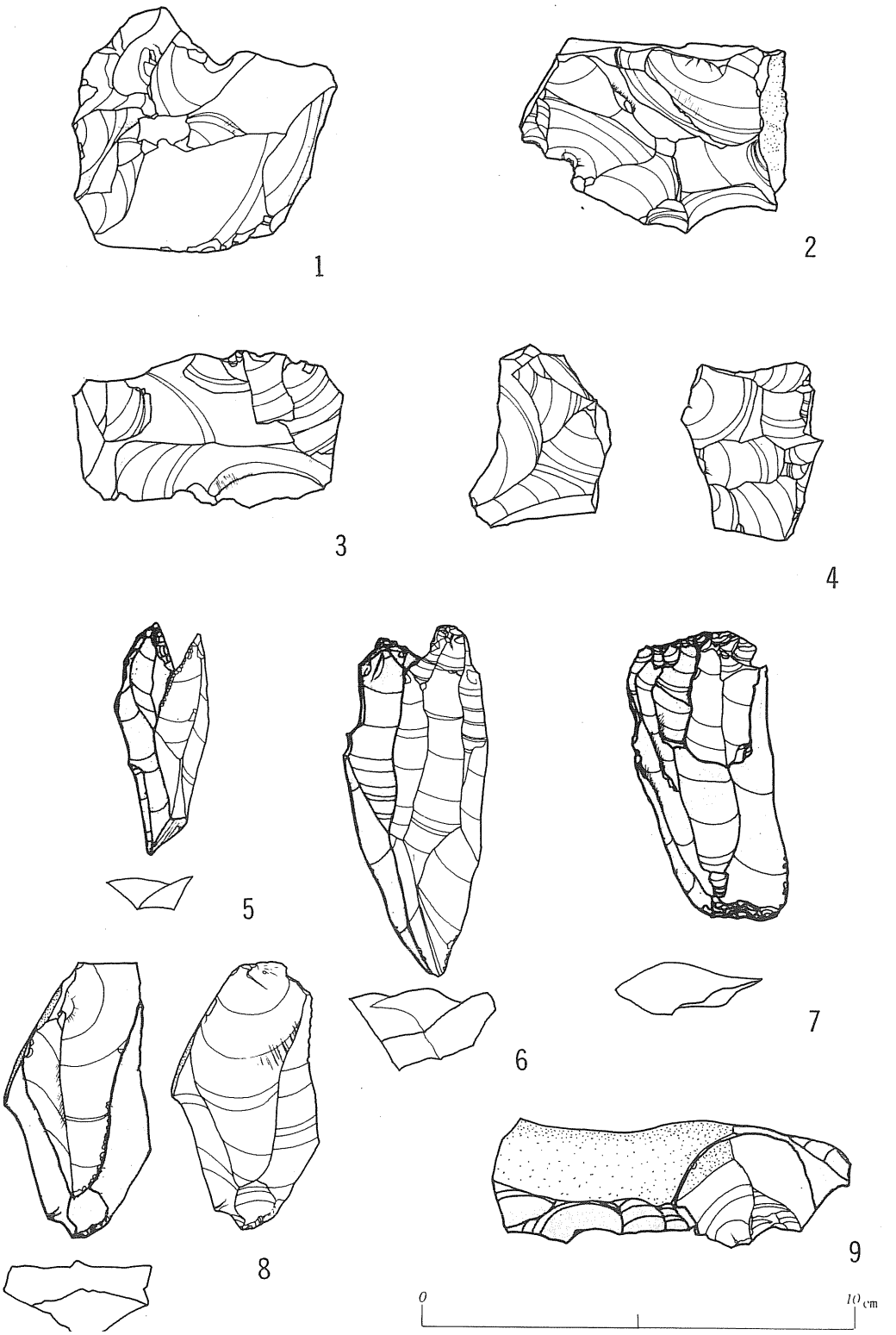
礫群と土坑

３ヶ所の礫群が検出され、土坑を伴なう礫群が２ヶ所（礫１群、礫２群）ある。礫３群は風倒木により移動している。礫は自然礫で径約３～20cmほどの亜円礫であり、径約160cm前後の範囲に密集する。堆積厚は50cmでⅣa、Ⅳb層中に含まれ先土器時代の遺物出土層と同一である。これらの礫は下部礫層の礫と考えられるもので凝灰岩が主である。礫群中に割れの生じたもの、表面が剝落した礫が多く含まれ、火熱による影響と考えられる。また礫表面に煤状の付着物がみられるものがある。

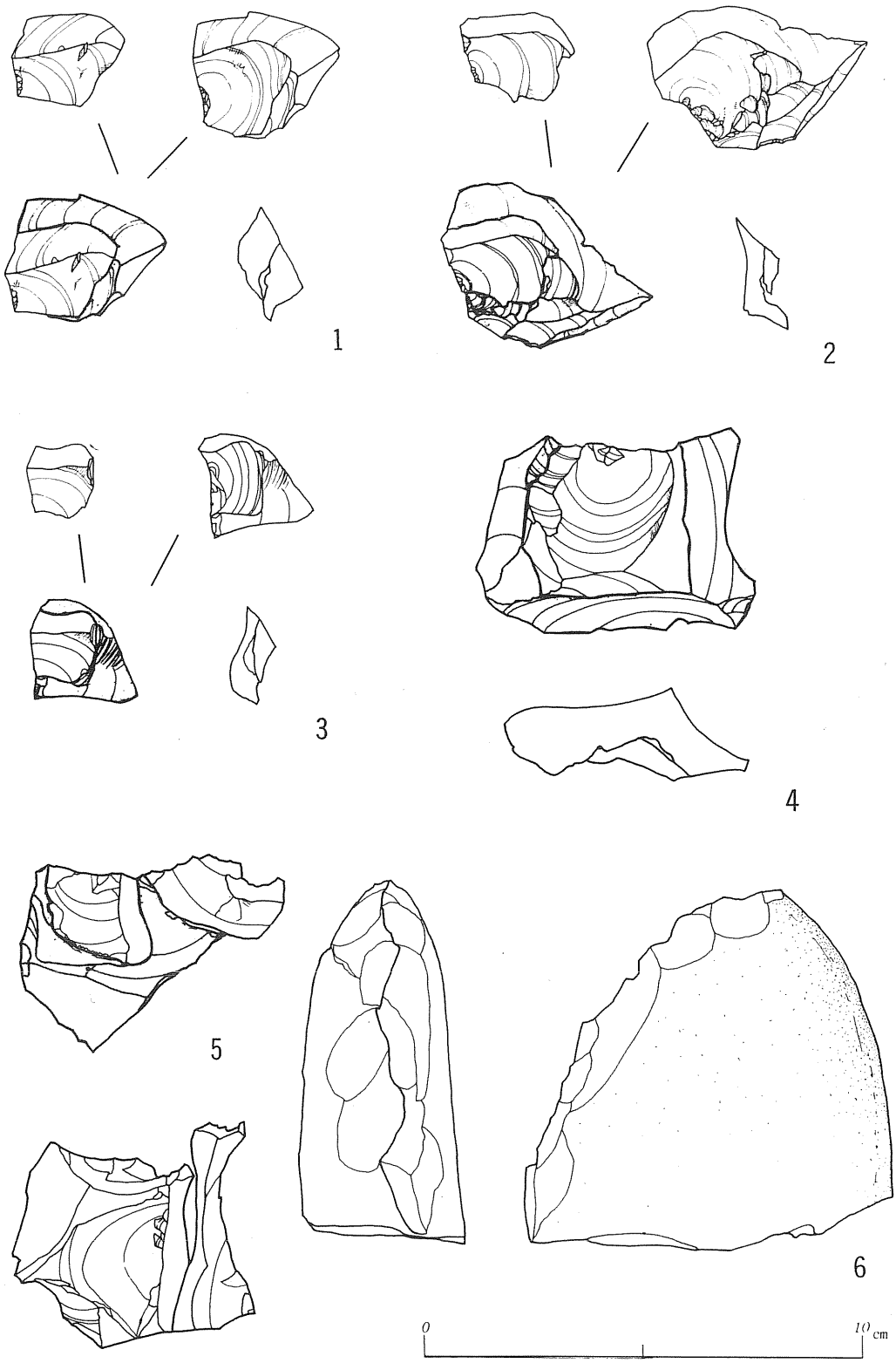
土坑は４基確認された。坑内の礫についても前述の礫群の礫と同様であり、坑内に特に炭化物が多く含まれていることはない。土坑１の上部には礫群があったと予想される。４号住居跡の構築時に取除かれたものであろう。坑内に礫がみられる。



第17図　石核



第18図　石核・接合資料



第19図　接合資料・礫器

まとめ

下堤G特徴としては石器の器種が少ない事である。（組成　ナイフ形石器、石刃、米ケ森型台形石器）、遺物の集中出土範囲は10m ×12m で、１つのまとまり（ユニット）であり、第２図の接合資料の関係からみてもユニットの中でなんらかの意味をもつまとまり（ブロック）を把握することは出来ない。石器は全体的に小形であり、大形の剝片（素材）はみられない。ナイフ形石器は、いわゆる金谷原型に類型をみるが、より小形であり、打面を残し、調整は背面基部側辺のみで細く作る調整で、先端が尖がる一群（第４図１～４、Ａ類Ⅰａ類ー下堤型ナイフ形石器）が特徴である。最も出土数の多い米ケ森型台形石器は形態が種々あるが、二次加工がみられる石器も含めて、その相違は石器の機能（本質）に影響はなく剝取された部位（順序）により異なるものである。米ケ森型台形石器の機能については富樫(1977年)[4]の言及があり、組み合せ具として細石刃とは別の装着方法が考えられると推定している。しかし、組み合せ具としては困難な条件（湾曲が強いこと、刃部の形状等）が多く、溝を掘る道具とされる彫刻刀形石器の伴出がない事など、組み合せ具としての機能は否定的である。が、米ケ森技法は大量生産志向である（他に米ケ森型台形石器を出土している岩手県上萩森遺跡では出土数が少ない）。米ケ森型台形石器の石核の各面に摩擦による光沢がみられるものが多く、米ケ森型台形石器も含め今後、顕微鏡的観察が必要とされる。接合関係をみると、これからの作業においてかなり接合すると予想される剝片、残核があり、石の色、質などから大別して２個体の母岩がある。これらの母岩から石刃技法を基盤として、ナイフ形石器、石刃、米ケ森型台形石器が生み出されているが、いわゆる石刃核は見当らない。これは核を残さない剝片剝離による結果か、他に製作地が存在するものであろうか。石刃の81％、ナイフ形石器の85％はＡ類であり単設打面による剝取の多い事を物語っている。このユニットにおいて米ケ森型台形石器が製作、使用された事は確かである。接合関係の作業を早く進めて剝片剝離技術的解明をしたい。

偏在的石器組成の様相を示すこのユニットは杉久保系文化の中で礫群、台石を包含し、石器製作地であり作業場、厨房所であると考えられ、ある一定期間の生活跡として把握できる遺跡である。

編年的な問題については来ケ森型台形石器を見る限り、出土している遺跡は比較的近接地域である岩手県胆沢町「上萩森遺跡」[5]秋田県協和町「米ケ森遺跡」能代市「此掛沢Ⅱ遺跡[6]と「下堤G遺跡」である。比較する遺跡は少ないが米ケ森型台形石器と共伴するナイフ形石器に共通性がありそうである。米ケ森型台形石器を含む石器組成をもつ遺跡が今後どの地域に確認されるものか、資料の増加に伴ない編年的位置づけがなされ、石器群の総体的な様相が呈示されるであろう。

現在まだ全資料の検討がなされていない段階であり、概報とせざるを得なかった。

参 考 文 献

1)内藤博夫：「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」　第4紀研究第4巻第1号　1965年

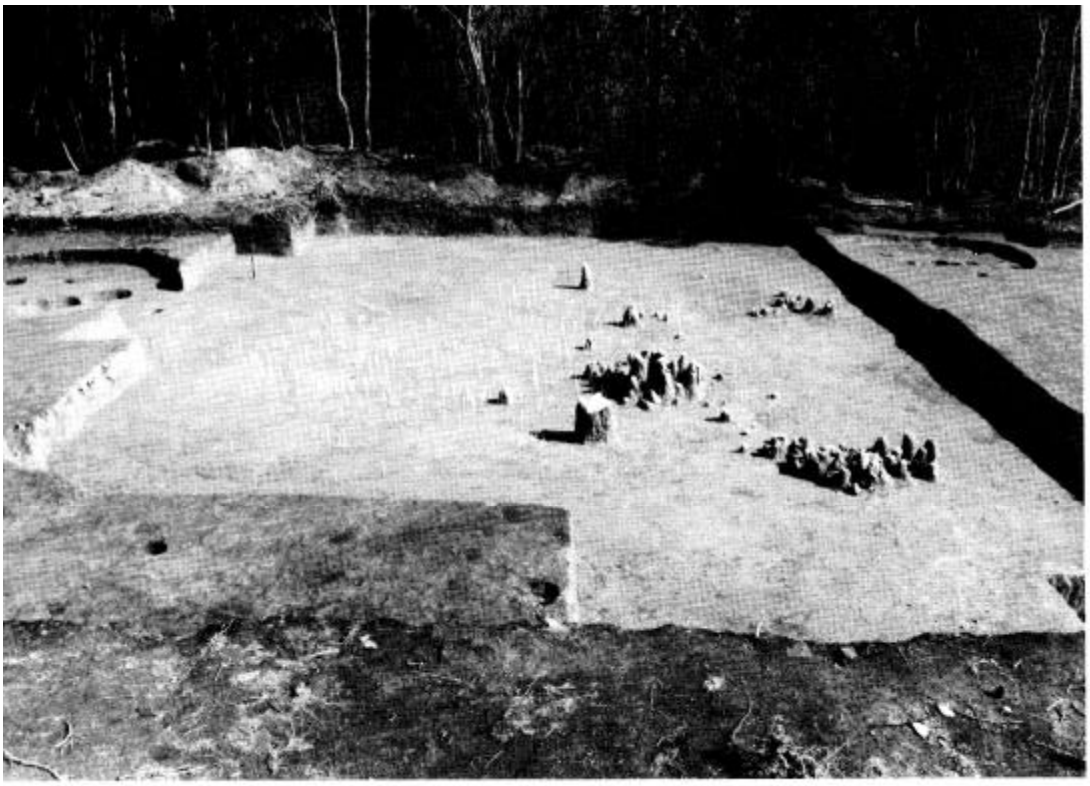
2)富樫泰時他：「米ケ森遺跡発掘調査報告書」　協和町教育委員会　1977年

3)富樫泰時：村岡百合子「米ケ森遺跡発掘調査略報」　協和町教育委員会　1976年

4)　2)と同

5)菊地強一：「旧石器時代の東北」　東北歴史資料館（岩手県）　1981年

6)富樫泰時：「遺跡詳細分布調査報告書」（此掛沢Ⅱ遺跡）　秋田県文化財調査報告書第93集、秋田県教育委員会　1982年

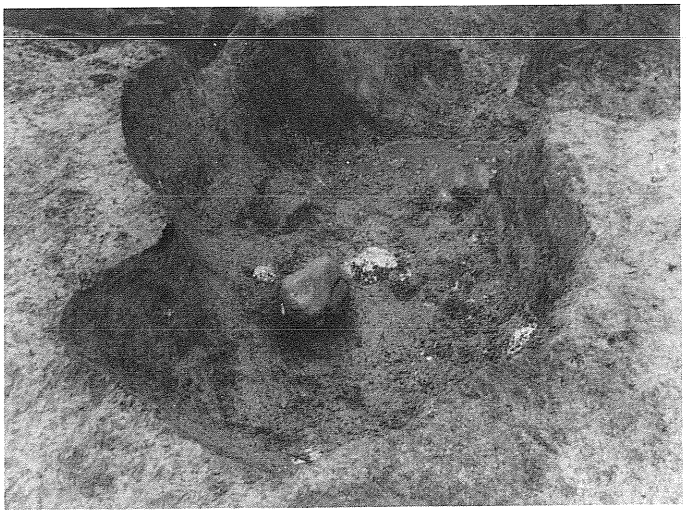


調査区全景　Ⅳb層(西→)
(南→)

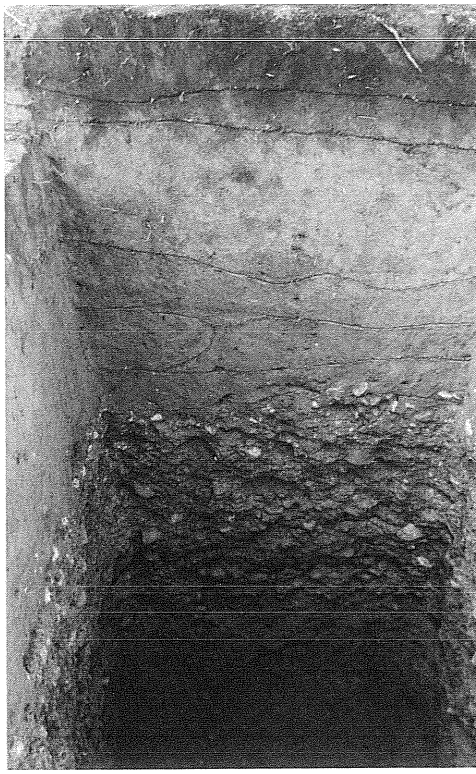
石器出土状態

礫1・2群
(南→)

図版1

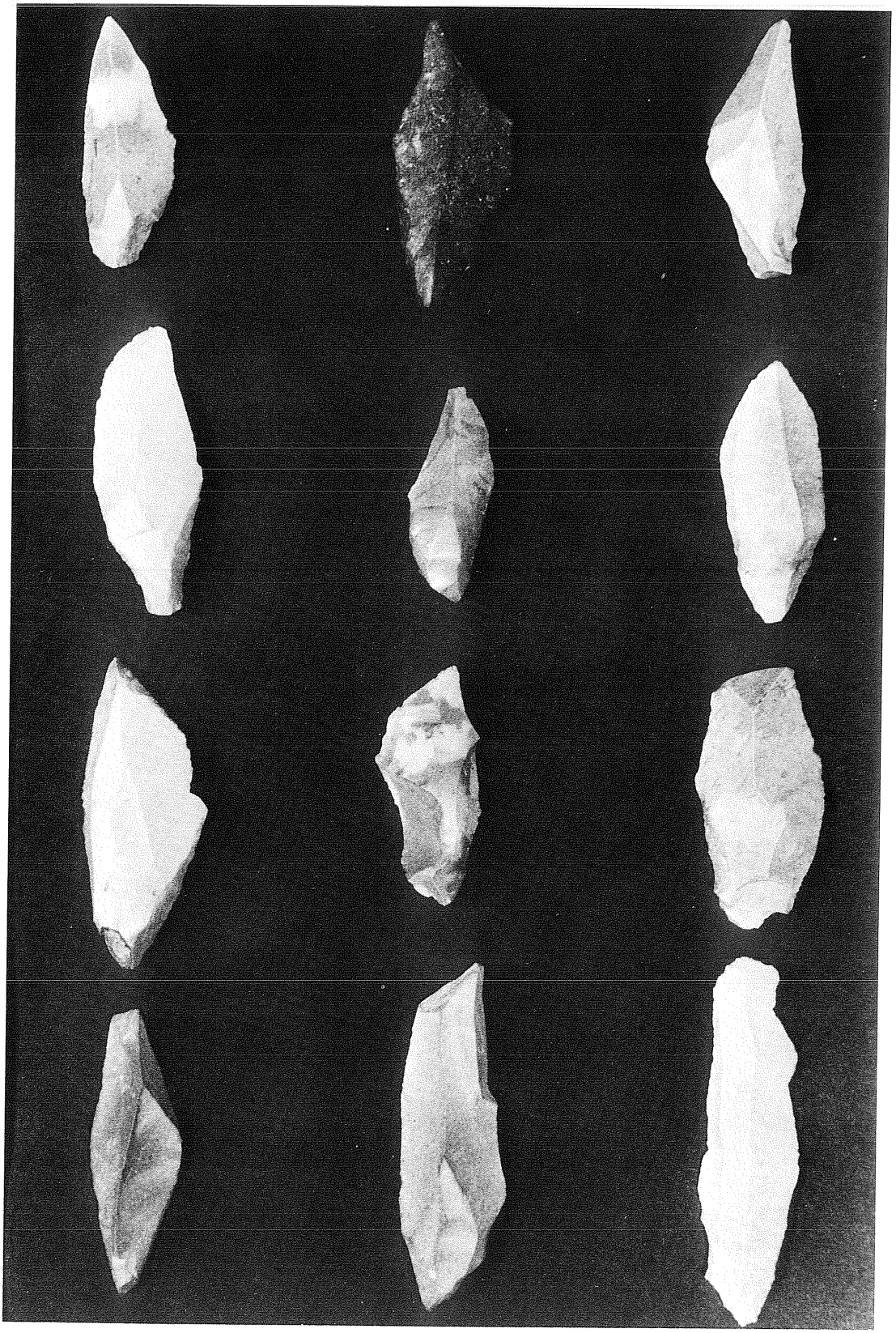


土坑１

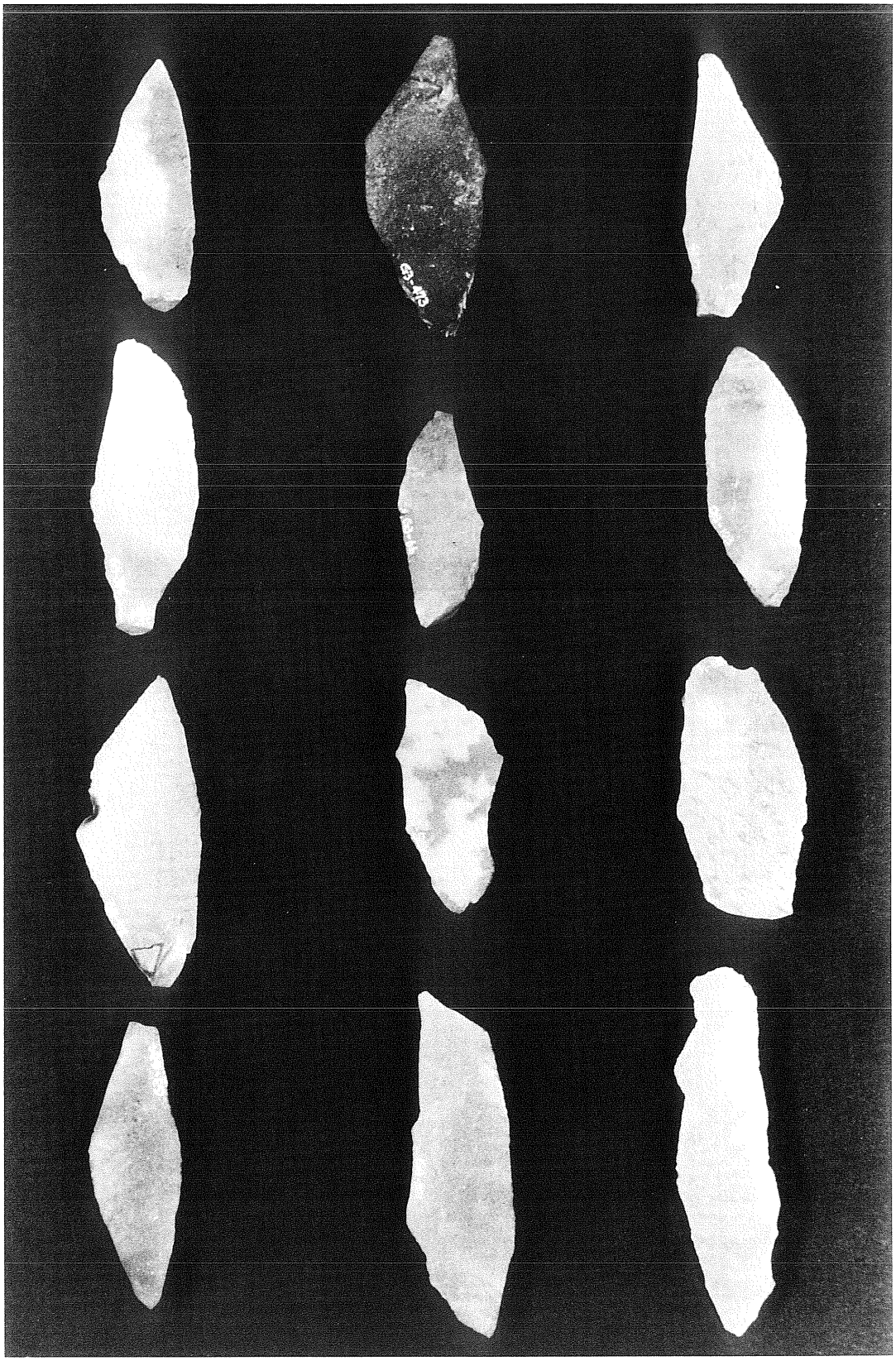


土層断面

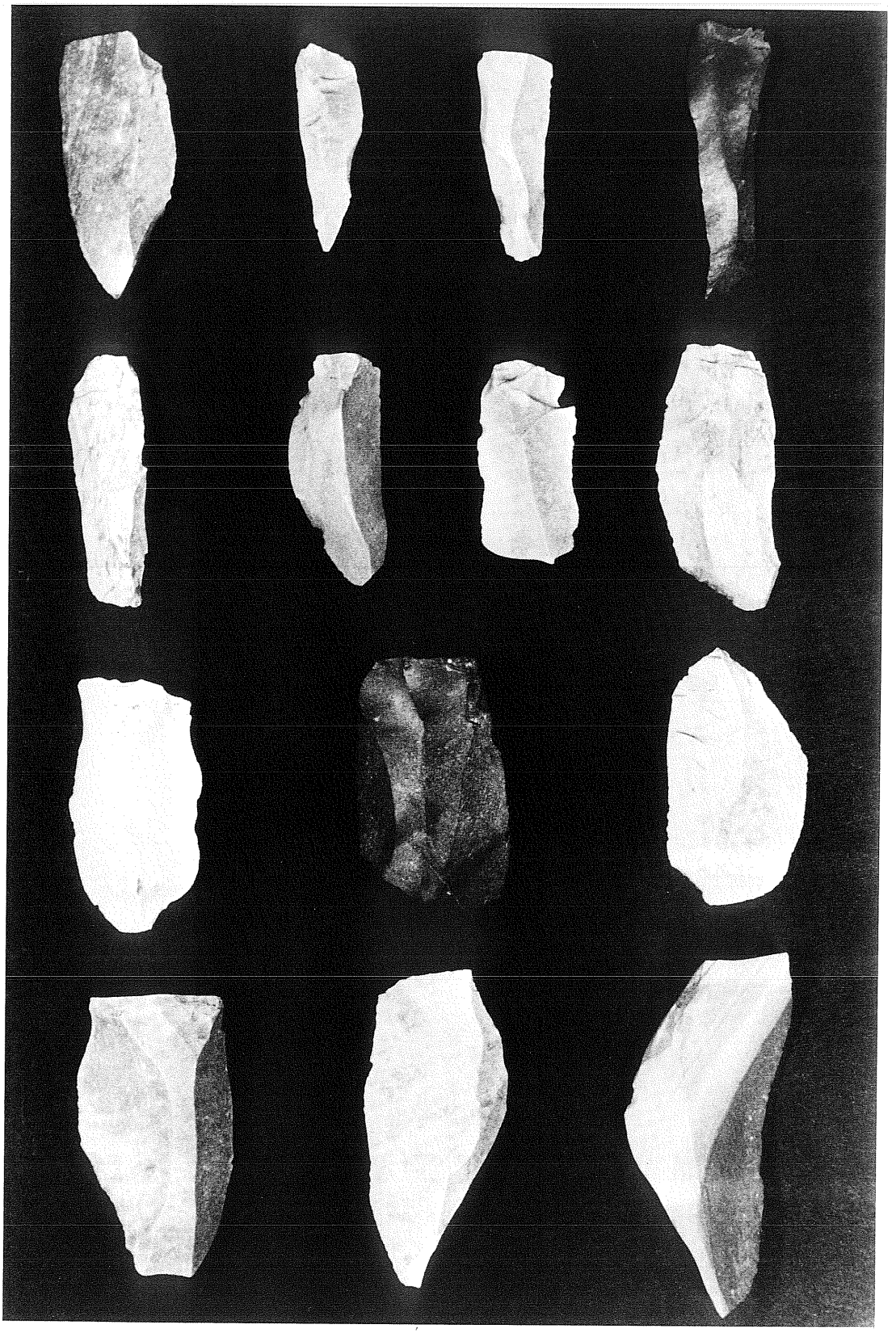
図版２　土坑２・３・４



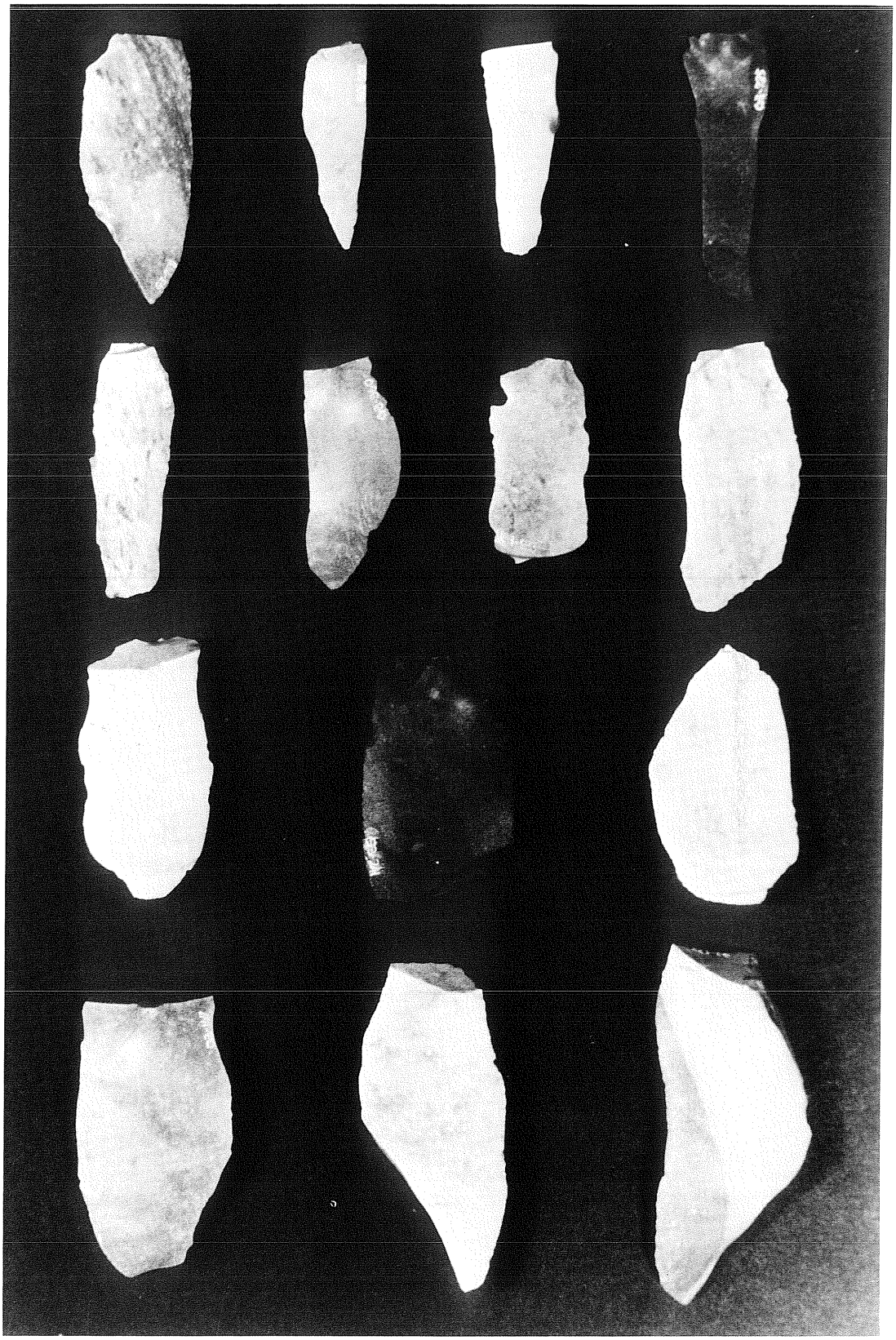
図版 3　ナイフ形石器



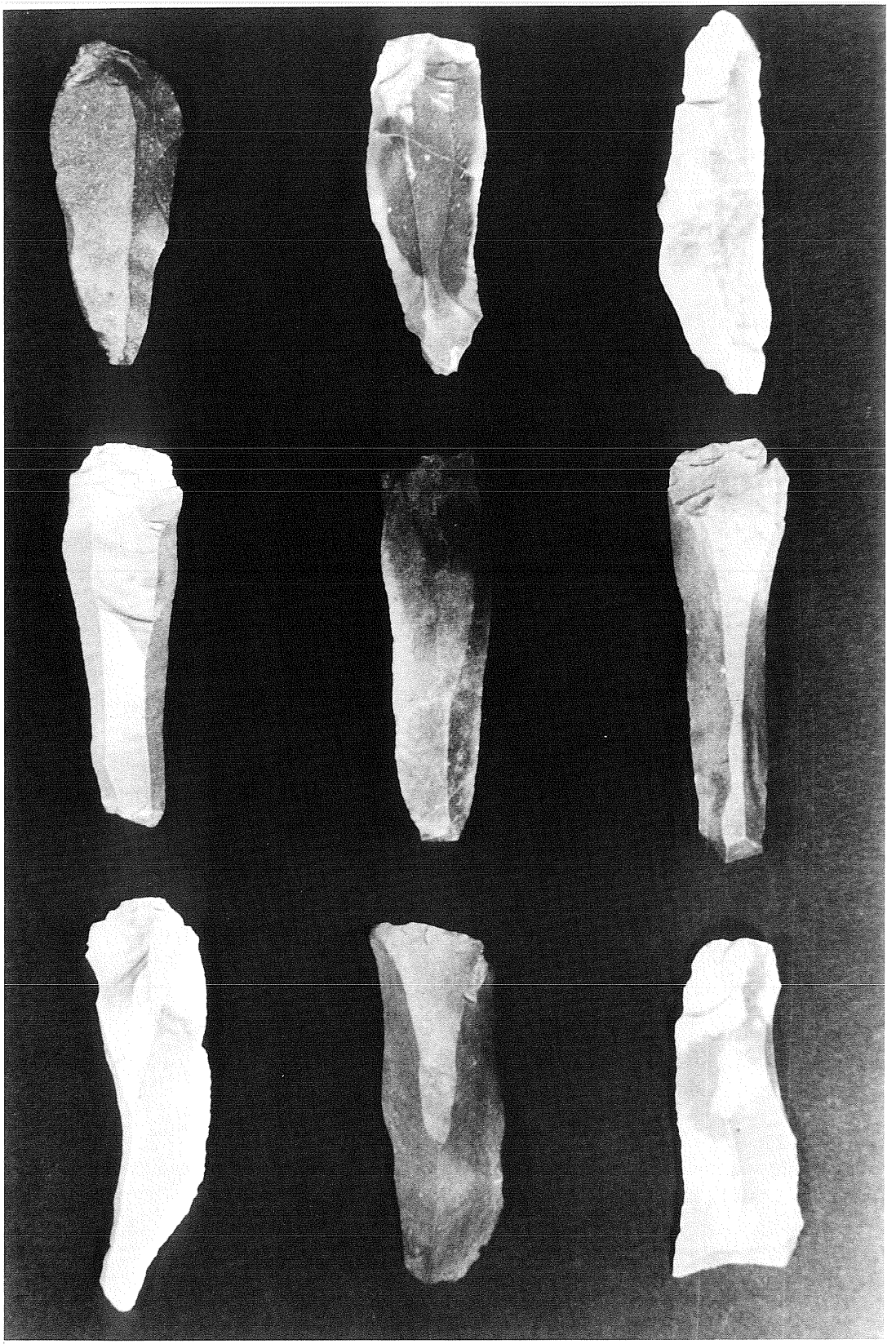
図版 4



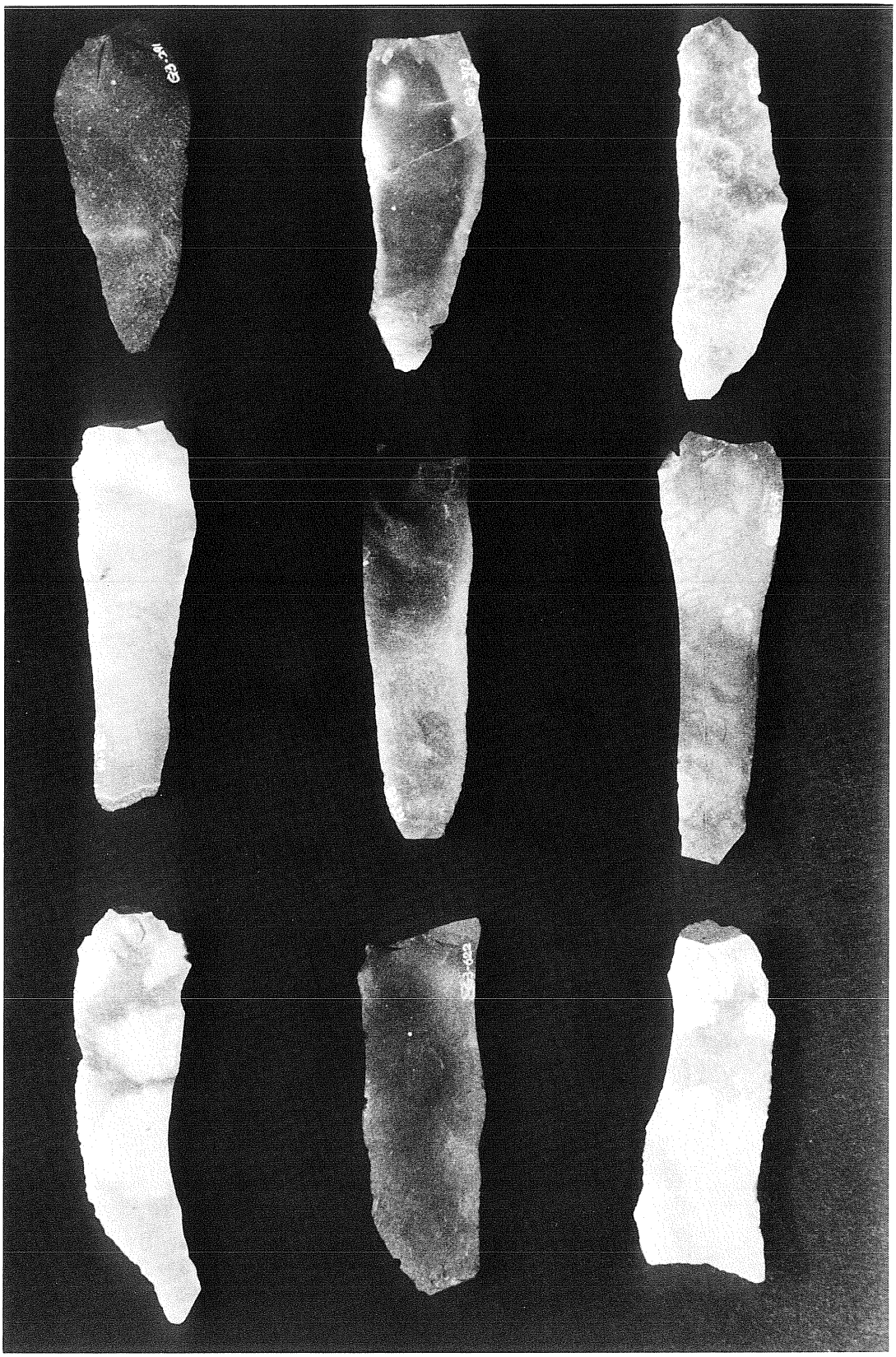
図版 5　ナイフ形石器・石刃



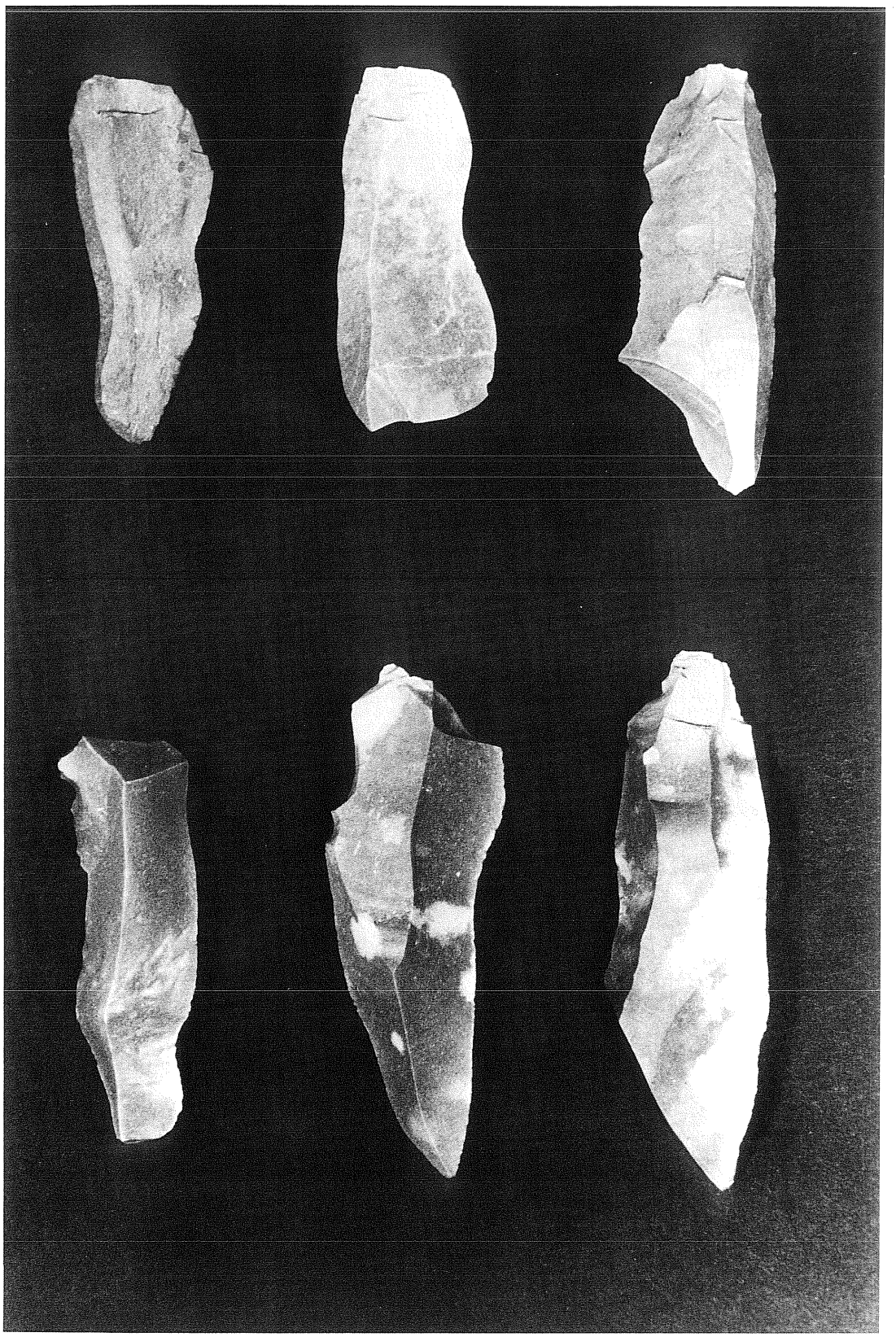
図版 6



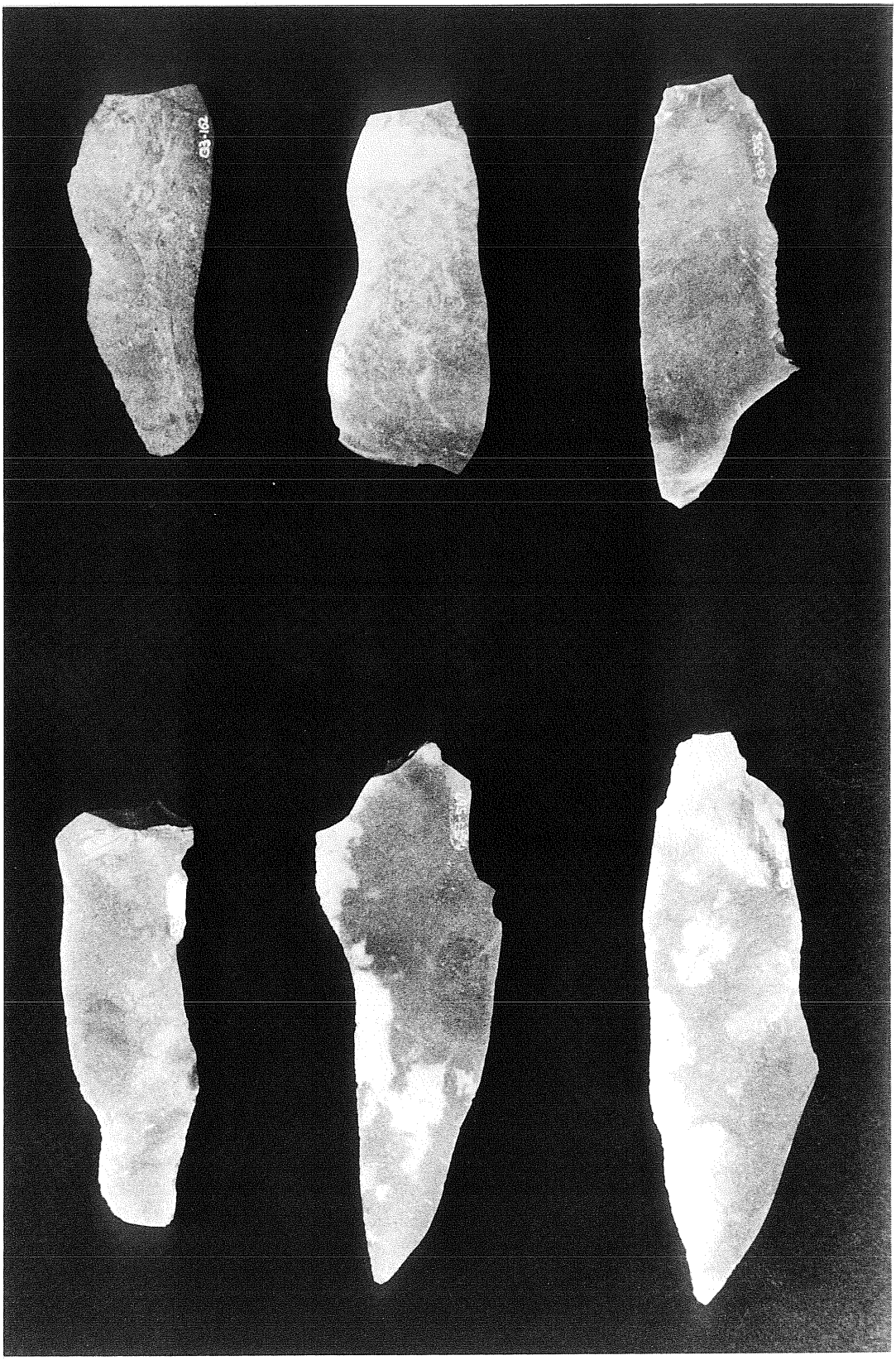
図版 7　石刃



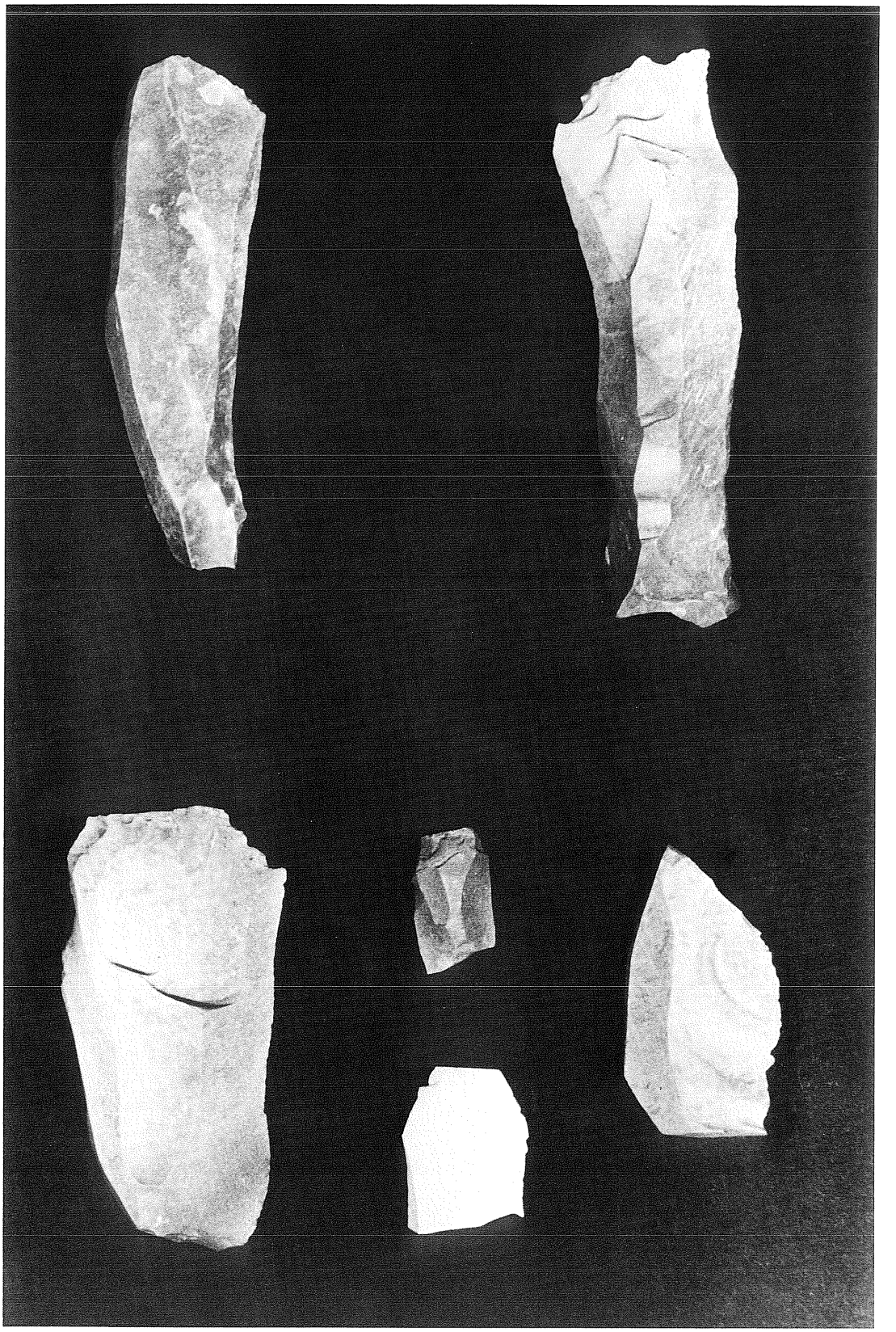
図版 8



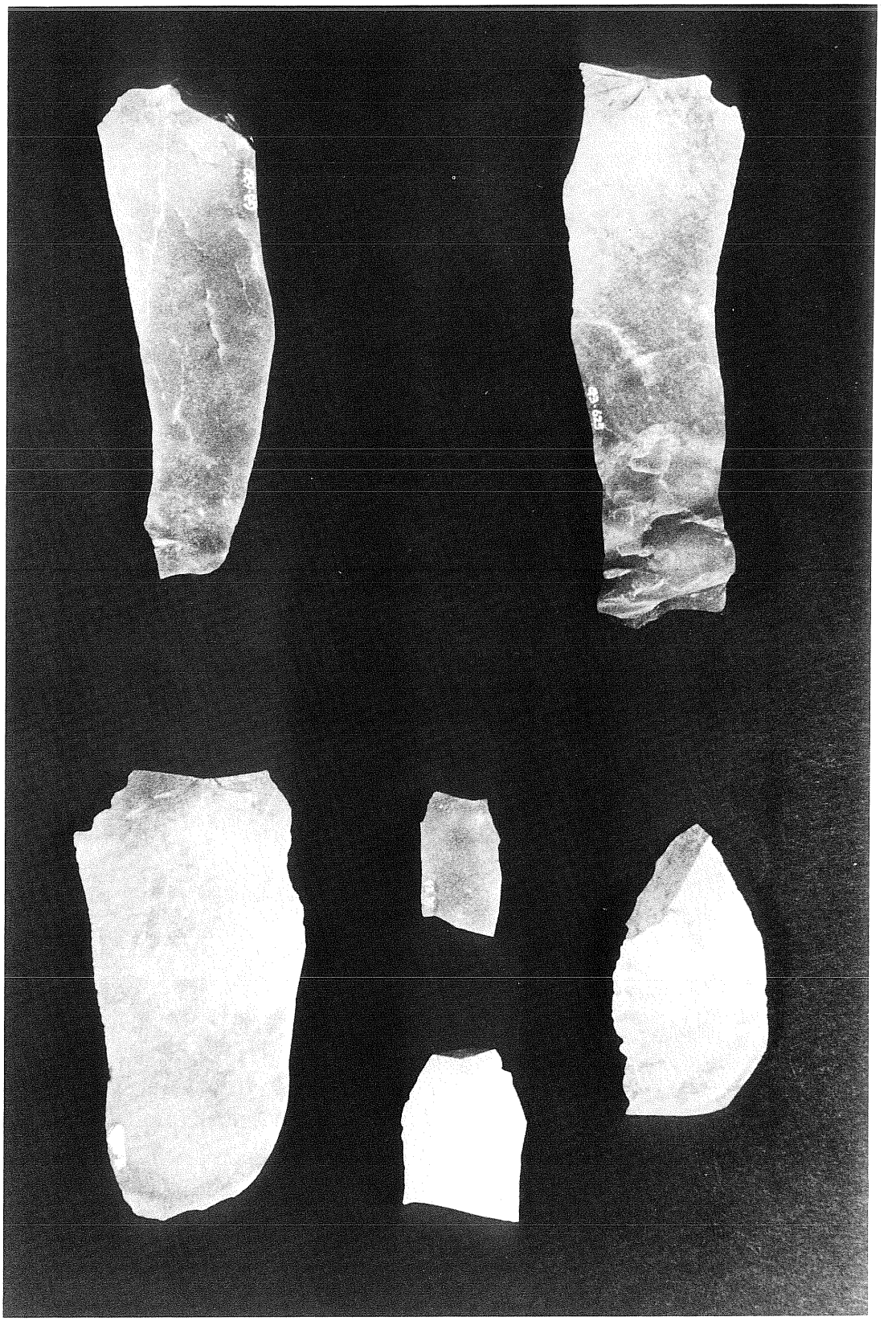
図版 9　石刃



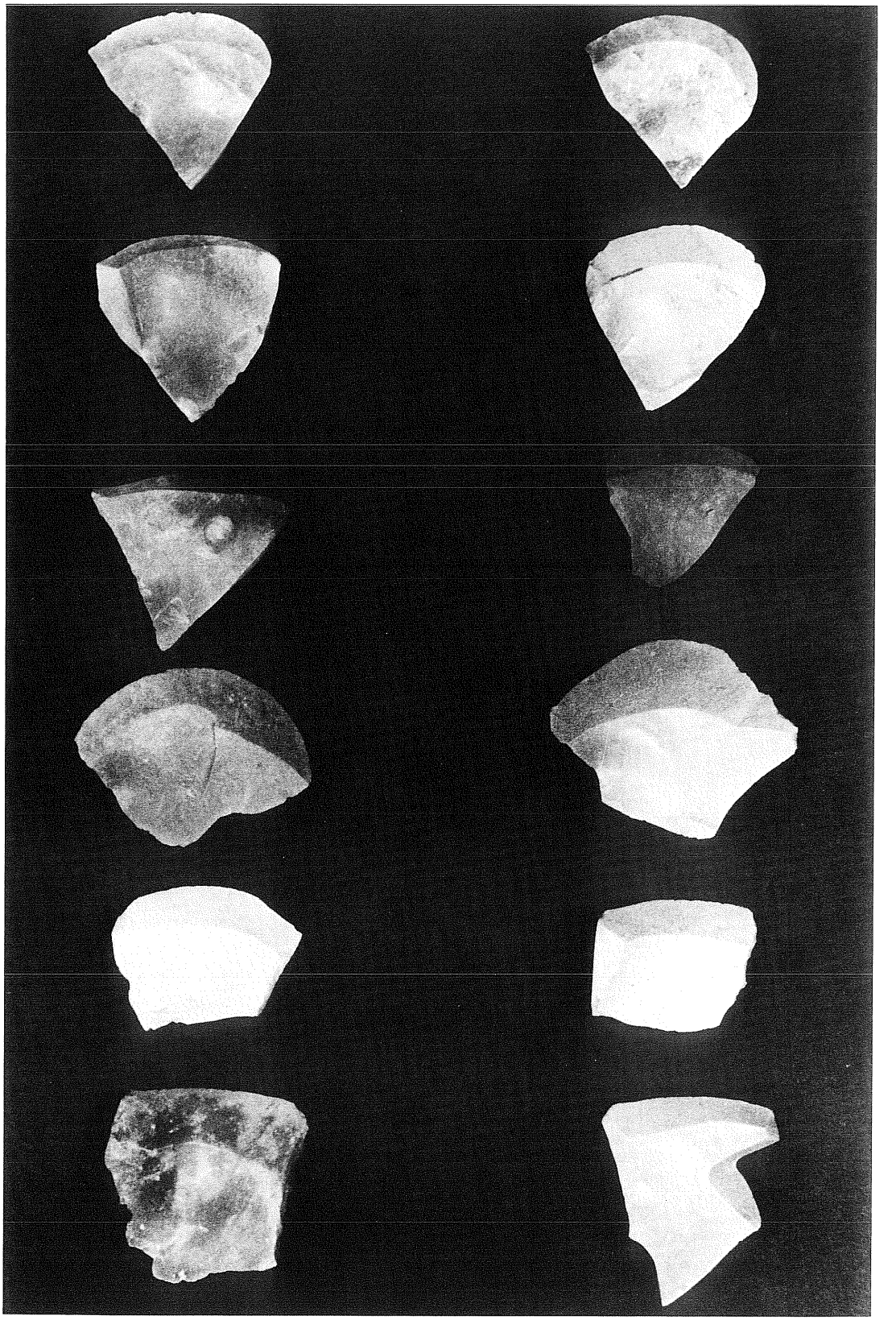
図版10



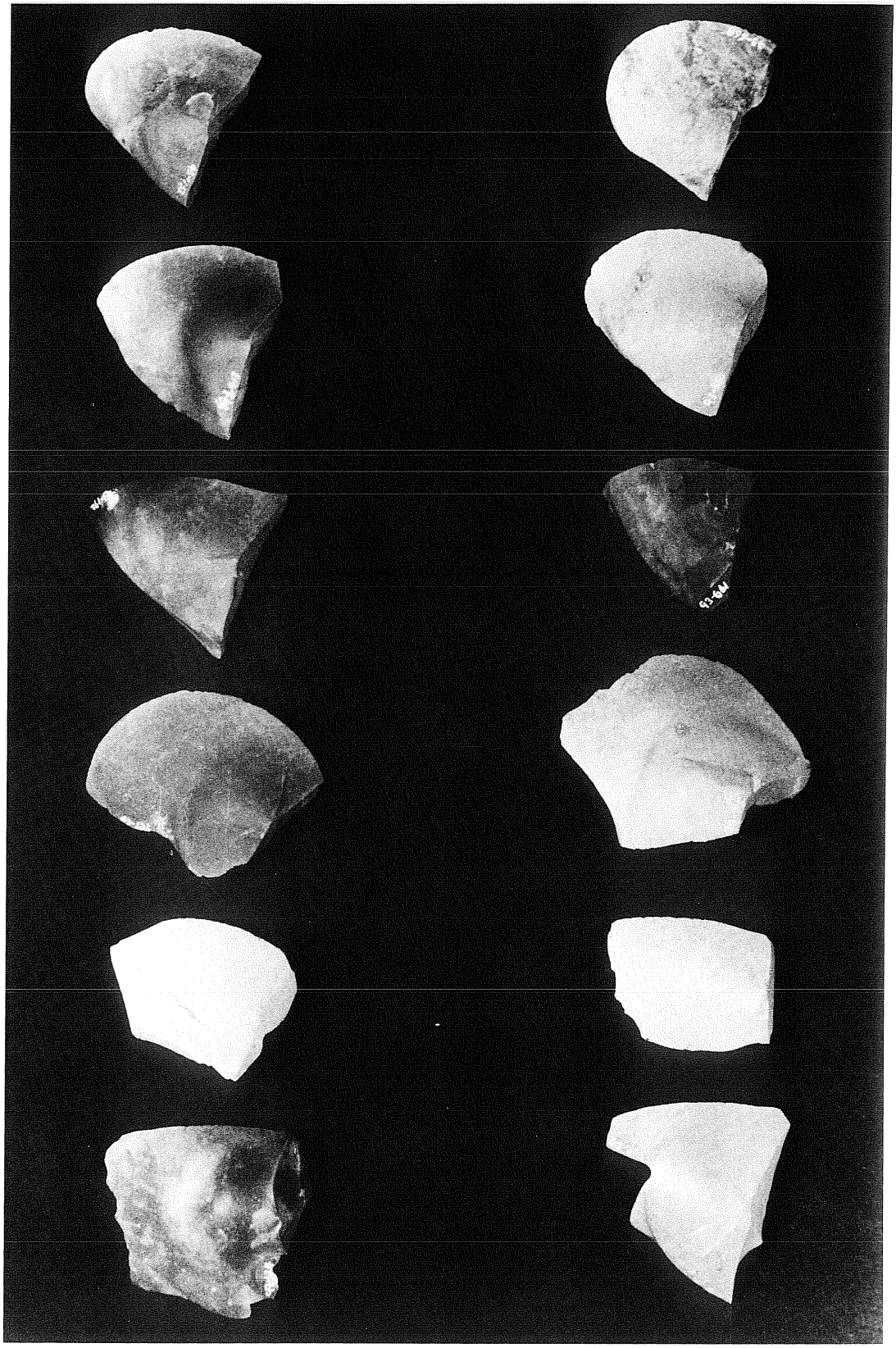
図版11　石刃



図版12



図版13　米ケ森型台形石器



図版14